

2173再構築 24

シナリオ「ララ」

エリー

人物表

※数えで書いた年齢。誕生日ではない。

※1/1～12/31単位。

※年齢の決まっている人物は登場する順番。

-

<2153年>

ララ（7）主人公

ソフィー（33）ララの母

サク（34）ララの父・喫茶憩い店主

ミサ（51）喫茶憩いの客・自営業

ボナ先生（40）

エメ（8）保護区の男の子

ミルク（12）保護区の女の子

ココア（11）保護区の女の子

ラミーヌ（50）山男リーダー

トニー（38）山男

スズ（22）山男

ヤニック（78）引退した老女
先生

エレベーターガール

※アユの解禁は夏。10月頃まで食べる。

-

<2154年>

ララ（8）

トニー（39）

ミルク（13）

ココア（12）

エメ（9）

ボナ先生（41）

レミー（35）山男

ボンボン（7）

スズ（23）

※保護区では、毎年一人、大人が入れ替わる。

-

<2158年>

エメ（13）

ララ (12)
ソフィー (38)
ボンボン (11)

-

<2159年>

ララ (13)
ボンボン (12)
ソフィー (39)
アゲハ (13)
エメ (14)

-

<2162年>

ララ (16)
アゲハ (16)
ロロ (23)
ソフィー (42)
ボナ先生 (49)
サク (43)
ミサ (60)
エメ (17)
ミュウ (15)
エリック (40) ミュウの父
司会の生徒
先生
男性

-

<2172年>

ララ (26)
ロロ (33)
ミュウ (24)

-

<2173年>

ララ (27)
サク (54)
ロロ (34)
ソフィー (53)

ララのイメージイラスト

ココナラで依頼した7歳のララのイメージイラストです。

作者はRia_08さんです。

<https://coconala.com/users/407193>



当初の予定では、保護区は白一色でした。服も壁もカーテンも白。

しかし、それでは威圧感があり過ぎるし、「作る技術を身につける」という意味でも問題があるので、ずっと迷っていました。

話の展開上は色の有無は関係しませんが、イラストを描く上では決めなければなりません。
服は白を指定して依頼しましたが、この色で提案されて、結局、色ありの世界に変えることにしました。

でもまだ迷っています。

全部白だと聖なる感じはでるのですが、カラーバランス的に不自然かなと。

その不自然さが保護区の個性といえそうなのですが、近年は病院ですら白以外の色なのにと
いう気持ちにもなる。

そうしなければならない理由があることしか、シナリオは基本書かないので、どちらでもいい
部分はどうしていいのか迷います。

はじめてイラストを依頼して、シナリオは書けても、監督にはなれないことを痛感しました
^^ ;

保護区では、服は制服と運動着と礼服とパジャマと下着類などが配給されます。

イラストは春の制服です。

制服は日常着る服です。

しかし、山男や、山や川で遊び回るエメは普段から運動着です。

礼服は、入村式、退村式、合同葬儀など式典の時と、自由区に行くときに着ます。

○字幕「2153年」

-

○高速エレベーターの中・上昇中

10人くらいの水色のスモックを着た年長さんたちがいる。

ララ（7）が、エレベーターのガラスごしに、壁に設置されたライトが流れ星のように過ぎ去る様子を、キラキラした瞳で見あげている。

パツン前髪に、肩甲骨あたりまで垂れさがったツインテール。

ピンクのスモックを来た中年の女の先生が園児たちを見ている。

操作パネルの前には、エレベーターガールが立っている。

エレベーターガール「まもなく展望室に到着いたします」

停止するエレベーター。

開く扉。

走り出す園児たち。

追いかける先生。

まだ一人だけ壁のライトを見あげ続けているララ。

先生が振り返り、声をかける。

先生「ララちゃん、みんないっちゃったよ。いこうよ」

気づかないでライトを見ているララ。

行ってしまう先生。

開くボタンを押したまま、そっとララの肩に手を置くエレベーターガール。

振り返るララ。

エレベーターガール「お客さま、とても気に入ってくださってありがとうございます。外の景色もすばらしいので、ぜひご覧ください」

エレベーターガールが開いた扉に腕を向ける。

明るい光に向かって歩き出すララ。

-

○展望室

360度ぐるりと見渡せるガラス張りの大きな空間。

中央のエレベーターから現れたララが、ガラス窓を見つけて近づく。

青い空、白い雲、深い水色の海には大きな船がとまっている。

海の隣には公園があって、豆粒のような人の姿が見える。

人々は、歩いたり、ベンチにすわったりしている。

ガラス窓にそって歩き出すララ。

街が見えてくる。高く美しく立派な建物が並んでいる。

しかし、200m四方だけが低く薄汚れている。

先生の声「ララちゃん、こっちはですよ～」

ララが振り返ると、先生が手を振っている。

先生の周りを園児たちが囲んでいる。

園児の輪に加わるララ。

ララ「先生、あの黒いところはなあに？」

先生「いいところに気づいたね。きれいな景色ももちろんだけど、あの暗い部分を見せたくて、みんなをここにつれてきたの。さあ、みんなでよく見ましょうね」

ガラス窓に駆け寄る園児たち。

ララも園児たちの後ろから、背伸びして黒い部分を見ようとする。

先生がララを抱き上げ、語り始める。

先生「みんなは今年で7歳になります。3月までは、ここ、開発の進んだ都会である、横浜の自由区で、お父さんやお母さんと一緒に暮らして、幼稚園に通ってきました。4月からはお母さんと一緒に、なかには一人で、自然が大切にされる山奥の保護区にいきます」

園児たちを見渡す先生。

真剣なまなざしで先生に注目するララ。

先生「保護区では、みんなが役割を持って村単位で暮らしています。子どもであるみんなの役割は勉強とお手伝いです。みんなできますか？」

「はい」と手を上げる園児たち。

一度上げた手を下すララ。

先生「13歳になったら、管理区にある寮に入って、工場で働きながら勉強します。3年間勤め上げて、卒寮する時に、保護区と自由区、どちらを選ぶか自分で決めます。どちらを選ぶにしても、大人の仲間入りをすることになるので、自分のことは自分でしなければなりません。できるかな？」

「できる～」と答える園児たち。

うつむくララ。

先生「保護区には勝ち負けはありませんが、決まりを守らなければなりません。自由区では好きなことができますが、失敗すればその責任を負わなければなりません。あの暗い部分は、いろいろな事情で行き場を失った人たちが、最後にたどりつく場所です。"死の街"と呼ばれています」

「こわーい」という園児たち。

はっと顔を上げて、窓を見るララ。

先生「みんなには難しい話かもしれないけど、よく覚えておいてね」

ララと先生が顔を見合わせる。

不安そうなララがゆっくりうなづく。

先生「大丈夫。きっと大丈夫」

先生がララを床におろす。

先生「さあ、しばらく自由時間ですよ。この階の中なら好きなところに行ってもいいです。そのかわり、わたしが"あつまれ!"と言ったら先生のところに来てね。おトイレに行きたい子はいませ

んか？」

一人の女の子が手を上げる。

先生「先生のところに来てね。他の子は好きにしていよ。ただし、走ってはいけません！」

園児たちがグループを作ってわざとゆっくり歩いて散らばっていく。

しかしララは、一人で暗い部分をじっと見つめたまま、ガラス窓にへばりついている。

手を上げた女の子が先生の隣に来て、先生と手をつなぐ。

先生「ララちゃんも一緒におトイレにいておこうね」

ララの手を取り、もう一人の女の子と3人で歩き出す先生。

何度もガラス窓を振り返るララ。

-

○横浜駅近郊の住宅街・全景

一戸建ての家が立ち並ぶ。

その一角に3階建てのビルがある。

1階に「喫茶憩い」の看板。

入口には、メニュー一覧と生クリームとイチゴがのったホットケーキの写真の立て看板。

その脇に2階へ続く階段がある。

ぐったりしたララを抱きかかえたソフィー（33）が階段を登っていく。

-

○喫茶憩い・ララの部屋

パジャマ姿でベッドに横たわるララ。

隣で心配そうにララのおでこに手を当てるソフィー。

ソフィー「最後だからって、やっぱり遠足なんて行かせるべきじゃなかった」

ララ「お母さん、そんなこと言わないで。わたしは行けてよかった。やればできるのよ」

サク（34）が扉から入る。

サク「ララ、起きられるか？」

ソフィー「お父さん、今は寝かしておいてあげて」

サク「でも明日で行ってしまう。そして二度と会えないかもしれないんだ。最後に俺の自慢のホットケーキを食べさせてやりたい」

ソフィー「そんな無理を言って、途中でお腹が痛くなったらどうするの？」

ララ「お父さん、わたし食べたい。食べる」

ベッドから降りるララ。

ソフィー「でもララ」

サク「生クリームは少な目、イチゴたっぷりにするから、何も全部食べなくたっていいんだ。ちょっとだけ」

ララ「うん、すぐ着替える」

部屋を出ていくサクとソフィー。

着替えはじめるララ。

-

○喫茶憩い・店内

客席で生クリームとイチゴがのったホットケーキを食べるララ。

カウンターの内側に立ち、ララを見守るサク。泣きそう。

店の扉が開き、ミサ（51）が入ってくる。

サク「いらっしゃいませ」

ララの隣に座るミサ。

ミサ「ララちゃん、いいね。わたしも同じもの。飲み物はアールグレーのホット。ミルクで」

カウンターのサクに声をかけるミサ。

サク「かしこまりました」

頬杖を突きながら、ララに質問するミサ。

ミサ「ララちゃんは、明日保護区にいくんでしょう。そのまま保護区にいるの？ 自由区に戻るの？」

ララ「分からない。お母さんはお母さんのいる保護区に戻って欲しいと言っているけど、ララはまたホットケーキ食べたい」

ミサ「そうだね。分かるよ。わたしなんて、好きなものを食べたいから、自由区で生き抜くことを選んだみたいなものだからね」

食べる手を止めて、ミサをじっと見るララ。

ララ「ミサおばちゃん、死の街って知っている？」

ミサ「知っているよ。遠足でタワーから見せられたの？」

ララ「うん、ララ、寝てばかりだし、いつかあそこに行くのかな？」

ミサ「競争に参加すらできなくて、負けちゃうと思っているの？」

ララ「頑張れば勝てるかな？」

ミサ「できないことを悩むより、できることを探したらいいと思うよ。やってみないとどっちか分からないけどさ」

ララ「うん、ララ頑張る！」

食べ始めるララ。

-

○喫茶憩い・前（朝）

手を振るサク。

手をつないで歩き出すララとソフィー。

-

○ローカル線・車内

窓側に座り、外の景色を眺めるララ。

隣でララを見守るソフィー。

-

○山奥の駅・全景

改札脇にトイレがある。

小型のバスが扉を開いて止まっている。

改札からララを抱えたソフィー出てきて、トイレに駆け込む。

出発するバス。

トイレから出てくるララとソフィー。

ベンチを見つけて座る。

ララ「バス、行っちゃったね。わたしが昨日食べたせいだ。ごめんなさい」

ソフィー「体が弱いのはララのせいじゃない。気にすることない。それより、バスに乗る前でよかった。トイレがないからね」

ララ「うん」

ソフィー「ちょっと休んだ方がいい。横になって」

ララ「大丈夫。起きていられる」

ソフィー「今はね。でも着いたらいろいろやらないといけないから、今のうちに休もう」

ララ「・・・わかった」

ソフィーのひざまくらでベンチに横になるララ。

-

○走るバス・全景（夕方）

うっそうとした木々に囲まれた山道をうねうねと走っていくバス。

-

○走るバスの中（夕方）

眠るララを抱きかかえて、バスの最後列に座るソフィー。

-

○保護区・全景（夜）

木造の大きな建物（センター）を中心に、一軒家が道路を隔てて扇状に広がっている。

一軒家は、木造平屋で、4部屋ほどのこじんまりした大きさと、全部で30軒くらいある。

。

木造の大きな建物（センター）から、小さな一軒家に人が散っていく。

-

○センター・客室（夜）

ベッドと机と椅子のある部屋。

ベッドでは、ララが眠っている。

ボナ先生（40）が、椅子に座り、トートタロットを机の上に展開している。スプレッドは、生命の樹。

※占いリスト1。

ララが目を覚ます。

ボナ先生が気づいて声をかける。

ボナ先生「起きられたら起きよう！」

起き上がったララの目に、机の上のトートタロットが飛び込む。

ララ「それはなあに？」

ボナ先生「トートタロットといって、タロットカードの一種で、占いの道具なんだが、初めてみるかね？」

うなずくララ。

ララ「何を占っていたの？」

ボナ先生「わたしがこの村で何をしたらいいか占っていたのさ」

ララ「占いが仕事なの？」

ボナ先生「いや、ララたちの先生さ。ボナ先生という」

ララ「ボナ先生？」

ボナ先生「そう。ボナだ。さあ、ララ、ベッドからおりてごらん」

ベッドから降りたララに、ボナ先生が端末を渡す。

ボナ先生「ララが寝ている間に、入村式は済んでしまった。村の人たちには、おいおい紹介するとして、入村を認める証として、端末を渡すから大切にしなさい。残りの制服や生活雑貨はソフィーさんから受け取るといい」

ララ「お母さんはどこにいるの？」

ボナ先生「ララの家にいる。わたしが送ってあげる。さあ、おいで」

手をつないで歩き出すララとボナ先生。

○センター・全景（夜）

センターから出てくるララとボナ先生。

立ち止り、振り返るボナ先生。

ララも振り返る。

ボナ先生「この一番大きな木造の建物が、センターと呼ばれる施設で、食堂も、教室も、ここにある。目立つからすぐわかるだろう？」

ララ「センター、食堂、教室」

ボナ先生に手を引かれ、ララが歩き出す。

○保護区・全景（夜）

センターから扇状に広がった、右端を真っ直ぐ進んでいくボナ先生とララ。

ボナ先生が立ち止り、空を指さす。

ボナ先生「わたしは、空に浮かぶ星、特に土星の研究をする天文学者だった。ずっと管理区で働いていたんだよ。昨日、この村に来たところさ。つまり、ララと同じ村人一年生というわけさ」

ララ「ふ〜ん、空の星を研究していて、どうして占いなんかするの？」

ボナ先生「星を見るうちに、西洋占星術について知りたくなって、タロットカードにも興味を持つようになったのさ。昔は、天文学と占星術はもっと近い関係にあったから、ちっとも不思議じゃないさ」

ララ「そうなの？」

ボナ先生「機会があったら、ララにも教えてあげるよ」

ララ「空の星？ 占い？」

ボナ先生「どっちもさ」

歩きはじめるボナ先生とララ。

-
○ララの家・全景（夜）

ボナ先生とララが明かりがついた家の前で立ち止まる。

ボナ先生がノックをする。

ソフィーが出てくる。

ボナ先生「部屋は片付きましたか？」

ソフィー「おかげさまで。ありがとうございます」

ボナ先生「それでは、また明日。おやすみ、ララ」

ララ「おやすみなさい、ボナ先生」

立ち去るボナ先生。

ララを家の中に入れるソフィー。

-
○ララの家・キッチン（夜）

流しとIHレンジと電子レンジと机と椅子と冷蔵庫と棚がある。

机の上に、ラップに包まれたおにぎりが2つ置いてある。

ソフィー「お腹すいたでしょう？ おにぎりを食べなさい。今、お茶を入れるから」

棚からやかんを出して、水をくみ、加熱するソフィー。

椅子に座っておにぎりを食べ始めるララ。

ソフィー「トイレと風呂と寝室と物置部屋があるのよ。あとで見てくるといわ」

ララ「今日はお風呂に入りたくない。疲れちゃった」

ソフィー「そうね。もう遅いから今日は食べたら歯磨きして寝よう」

ララ「端末見たい」

ソフィー「しょうがないな。寝る支度してから30分だけよ」

ララ「うん！」

ニッコリ微笑むララ。

-
○ララの家・寝室（夜）

ベッドが二つ並んでいる。

右側のベッドに入って端末をいじっているララ。

足元のクローゼットを開いて、洋服類を整理しているソフィー。

ララ「お母さん、使い方教えて！ なんかお手紙来ているみたい」

ソフィー「見せてごらん」

ララの隣に座るソフィー。

ソフィー「文字をタッチしたら見られるのよ。やっごらん」

端末画面に「お知らせ1通」の表示。

そっとさわってみるララ。

「おれはエメ。ともだちになってやる。かんしゃしろ」と書かれている。

ララ「お母さん、エメって知っている？」

ソフィー「たぶん、ララより一つ上の男の子のことね。今まで一番下だったから、ララが来たのがすごく嬉しいんだって、みんなにからかわれて怒っていたっけ」

ララ「ふーん、ララ、みんなと同じように動けないけど、お友達になれるかな？」

ソフィー「5年生と6年生の女の子もいたから、大丈夫じゃない。さあ、そろそろ寝ようね。充電するからかしなさい」

ララがソフィーに端末を渡して布団に入る。

端末を二つ充電するソフィー。

ソフィー「明日、お母さんは給食係のお仕事で先にセンターに行ってしまうけど、一人で食堂にこられるわね？」

ララ「うん、大丈夫。おやすみなさい」

ソフィー「おやすみ」

目を閉じるララ。

布団に入って、電気を消すソフィー。

-
○保護区・全景（朝）

家々から、センターに人が集まっていく。

ララも歩いている。

-
○センター・給食室（朝）

お盆を持った村人たちが、カウンターからご飯とみそ汁を受け取る。

そして、長机に座って、食べ始める。

ララも真似をして、受け取る。

そして、一人で食べ始める。

すると、隣にエメ（8）が座る。

坊主頭に、泥じみがとれない運動着を着ている。

テーブルの上の調味料入れから一味唐辛子をとるエメ。

エメ「俺の父親は横浜市の貴族議員で、俺はその後を継ぐ男だから、これくらいは平気なんだ」

どかどかと一味をかけて、味噌汁を飲むエメ。

エメ「どうだ、すごいだろう？」

困ったようにうなづくララ。

エメ「ララにもかけてやるよ」

ララ「わたしはいらない！」

両手で味噌汁のお椀をおおって隠すララ。

エメ「弱虫だな」

さらに一味をかけるエメ。

味噌汁を口にしてむせるエメ。

エメに背を向け、食べ始めるララ。

○センター・教室（朝）

小さい机が2×2並んだ部屋。

教壇脇には大人用の大きな机と椅子。

後列に並んで座ってミルク（12）とココア（11）がひそひそ話している。

前列にエメが座って、腕組みをしている。

ボナ先生と一緒にララが入ってくる。

ボナ先生「ララはエメの隣に座って」

空いている席に着くララ。

ボナ先生「昨日の入村式で話したように、今日からわたしがみんなを教える。ボナ先生と読んでほしい」

ミルクが手を上げる。

ミルク「ボナ先生は占いが得意って本当ですか？」

ボナ先生「本当さ。占って欲しいことがあるのかね？」

ミルクとココアが顔を見合わせてクスクス笑う。

エメ「占いなんてインチキだ。俺は信じないね」

ボナ先生「そういう考え方もある。占いは100%ではないし、吉凶を当てるものでもない。自分の心と対話する時に一番力を発揮する」

ミルク「でも本当かもしれないでしょ？ 先のことが見える先生なんて、なんだか怖い！」

ボナ先生「許可なく、いたずらに占ったりはしないから安心しなさい。さあ、自習を始めよう」

タブレットを取り出すエメとミルクとココア。

ララも真似をしてタブレットを机から取り出す。

どこを押せばいいのか分からないララ。

ララの隣に立つボナ先生。

ボナ先生「ここを押してごらん」

タブレットのボタンを指さすボナ先生。

ララがおそるおそるちょっと触れる。

ボナ先生「強く、長く押すんだ。簡単には壊れないから心配いらない」

強く、長く押してみるララ。

タブレットが明るくなる。

ボナ先生「わたしが、学習予定を送っておいたから、それを見ながら、順番に、自分のペースで

すすめたらいい。さあ、お知らせをタッチして」

うなずき、タブレットを操作するララ。

○センター・食堂

ボナ先生の隣にミルクとココアが座っている。

反対側にはララとエメ。

ボナ先生「さあ、お昼ご飯をいただきます！」

それぞれ、お盆にのったご飯とみそ汁と卵焼きを食べ始める。

他の村人たちも入ってくる。

○センター・教室

席についてタブレットを操作するララ、エメ、ミルク、ココア。

子どもたちの周りを歩き回るボナ先生。

ピピピッと音になる。

ポケットから端末を取りだし、アラームをとめるボナ先生。

ボナ先生「今日は、終わりにしよう。明日は、山神さまに会いに行くから、遅れないように」

ミルク「山のぼりなんてめんどくさい」

ココア「疲れるだけよね」

うつむいているララ。

エメ「ララ、どうした？」

ララ「きとお母さんが駄目って言う。もしかしたらできるかもしれないのに！」

ボナ先生「確かに、ソフィーさんからララは行かせられないと聞いている。でもねララ、今年だけじゃないんだから、大きくなってから行ったらいいさ」

うなずくララ。

○ララの家・キッチン（夜）

ポロポロ泣いているララ。

ソフィーが肩に手を置きなでている。

ララ「どうしても駄目？」

ソフィー「幼稚園の最後の遠足で寝込んだことを忘れたの？ 今度はもっと大変なのよ」

ララ「でも」

ソフィー「自然は偉大だけど、厳しいものなの。都会とは比べ物にはならない。エレベーターもないし、自分の足で歩かなくてはならないのよ。だから、あきらめて。ララには無理よ」

声をあげて泣きはじめのララ。

ソフィー「悲しいよね。丈夫な体に産んであげられなくてごめんね」

ララを抱きしめ、トントンするソフィー。

○林道・全景（朝）

同じくらいの大きさの木が整然と並ぶ、広い山道を車が走っている。

○林道・車中（朝）

ボナ先生とエメとミルクとココアがのっている。

運転席にはラミーヌ（50）、助手席にはトニー（38）がいる。

○センター・教室（朝）

一人で自習しているララ。

突然、立ち上がって、教室を出ようとする。

そこへスズ（22）が来て、ララを捕まえる。

ララ「離して！」

スズ「どこへ行く気なんだ？」

ララ「もしかしたらできるかもしれないのに！」

スズ「歩いてみんなに追いつく気か？ 車じゃないと入り口にさえつけない！」

ララ「そんなあ〜」

スズ「わたしはスズ。山男だ。お前の見張りを頼まれた」

ララ「スズさんはいいわね。山男なんてなれて。わたしなんて駄目ばかり！」

スズ「一人で山に入るなんてアホでもせん。だが、アホかもしれんから見張れと言われたが、本当にアホだったとはな！」

ララ「アホ、アホ言わないでよ！ ララって名前があるんだから！」

スズ「戻れ、ララ！」

ララ「犬みたいに言わないでよ！」

席について、タブレットを取り出すララ。

ララの隣の小さな椅子に座るスズ。

頬杖をついてジーッとララを見るスズ。

ララの顔が、だんだん歪んで、涙がポロポロこぼれる。

スズ「そんなに行きたいのか？」

涙を両手で拭きながら、何度もうなずくララ。

スズ「しょうがないな。入り口までだぞ。ついて来い！」

ララ「うん！」

教室を出ていくララとスズ。

○原生林・全景

さまざまな種類の巨大な樹が生えた、急な斜面を登るラミーヌ、ミルク、ココア、エメ、ボナ先生、トニー。

○社・全景

山頂の開けた場所に小さな社が建っている。

一列に並んでお参りするラミーヌ、ミルク、ココア、エメ、ボナ先生、トニー。

-

○林道・全景

車が走っている。

-

○林道・車中

運転席にスズ、助手席にララ。

-

○原生林・入口

車から降りるスズとララ。

いろんな種類の巨木が並んだ急な坂道が広がっている。

スズ「ここまでが、林道。ここから先が原生林だ。歩いて進むしかない。だからララはここまでだ。ちょっとまっている。おにぎりをもらってきた。昼にしよう！」

車に戻るスズ。

ララが原生林に駆け出す。

-

○社・全景

社から離れた場所で、ラミーヌ、ミルク、ココア、ボナ先生、トニーがおにぎりを食べている。

一人、社に近づき、扉を開けて、手鏡を取り出すエメ。

稲妻が落ち、大粒の雨が降り出す。

ボナ先生「エメ、こちらにきなさい！」

手鏡をポケットにしまってボナ先生のところに駆け寄るエメ。

-

○原生林・入口

ザーザー振りの雨。

スズが顔を出し、ララを呼ぶ。

スズ「おかしいな。今日は晴れの予報なのに。風邪をひくから車に入れララ！」

雷鳴が響く。

スズ「ララ？」

端末を取りだし、あたりの様子を見ながら電話をかけるスズ。

-

○原生林・坂道

土砂降りの雨の中を、上へ上へと登っていくララ。

転んで、滑り落ちる。

気を失うララ。

○原生林・入口

車が2台ならんでいる。

激しい雨がピタッと上がる。

1台が走り出す。運転席にトニー。後部座席にボナ先生とエメとミルクとココア。

残された1台の運転席からラミーヌ、助手席からスズがおりる。

原生林に入るラミーヌとスズ。二人とも矢と弓を持っている。

○原生林・坂道（夕）

気を失っていたララが気づく。

黒い影が動く。

スズの声「ララ、動くな！」

ヒューっと鋭い音。

ギャーという声と共に、黒い影が去っていく。

立ち上がろうとして座り込むララ。

スズが駆け寄る。

スズ「アホ。熊にやられるところだったんだぞ！」

ララ「だって！」

スズ「こんなに早くに熊が起きているなんて運が悪い。でも一人で入ったララはもっと悪い」

ララ「ごめんなさい」

スズ「山神の社はもっと近い場所にある。こんな奥まで一人で入るなんて、わたしでもしない。ともかく動くな」

端末を取り出して電話を始めるスズ。

泥だらけの自分の姿を見るララ。ふと、意識がなくなる。

抱きかかえ、額に手を当てるスズ。

スズ「すごい高熱だ。しっかりしろ！」

ララの体をさするスズ。

○センター・医務室（夜）

ベッドで点滴を受けるララ。

眠っている。

○センター・食堂（夜）

村人たちが並んでいる。

中央に立って、ペコペコ頭を下げているソフィー。

○ララの家・台所（朝）

ララの髪をツインテールにしながら話しかけるソフィー。

ソフィー「まだ休んでいていいのよ。無理しないで」

ララ「もう大丈夫」

ソフィー「辛くなったら、ボナ先生に言うのよ。我慢しちゃダメよ」

ララ「うん。行ってきます！」

ソフィー「行ってらっしゃい」

靴をはいて家を出るララ。

両手をあわせて祈るソフィー。

-

○センター・教室（朝）

エメが一人で席についている。

ララが入ってくる。

エメ「ララ、こっち来いよ！」

おそろおそろ近づくララ。

エメ「これやる。神さまだ」

手鏡を差し出すエメ。

ララ「これが神さま？」

エメ「そうだ。社の正体だ。ララが来られないから、俺が持ってきてやった」

ララ「でもみんなの神さまなのに、わたしがもらっていいの？」

エメ「ララは村の一員になったんだから、いいに決まっている」

無理矢理ララに手鏡を持たせるエメ。

ココアとミルクが現れる。

急いでポケットに手鏡をしまうララ。

ボナ先生が現れる。

ボナ先生「ララ、大切な話があるから、ちょっときなさい。みんなは自習するように」

タブレットを出すエメとココアとミルク。

ボナ先生の後について教室を出るララ。

-

○保護区・全景（朝）

センターから出てくるボナ先生とララ。

家々の間を歩いていく。

-

○ボナ先生の家・前（朝）

一番端の家で止まるボナ先生とララ。

ボナ先生「ここはわたしの家だ。入りなさい」

家に入るボナ先生とララ。

○ボナ先生の家・台所（朝）

椅子に座るララ。

ポットで紅茶を入れるボナ先生。

ボナ先生「ララは家が喫茶店だから紅茶が好きだと聞いているが、あいにくレモンもミルクもないんだ。でも砂糖ならある。入れるかね？」

ララ「うん。でも紅茶も砂糖も大切なんでしょ？」

ボナ先生「これから、とても大切な話をする。ララの人生を左右する重要なことだ。ララは決断しなければならない。そのためのプレゼントさ」

ララ「何を決めるの？」

二つのカップにポットから紅茶を注ぐボナ先生。

片方のカップと砂糖入れをララの前に置くボナ先生。

砂糖入れからカップに砂糖を入れて、スプーンでかき混ぜるララ。

紅茶を一口飲んで、ララの前に座るボナ先生。

沈黙の果てにボナ先生が語り出す。

ボナ先生「人には向いたことと、向かないことがある。向かないことに時間を費やすより、向いたことをした方がいい」

ララ「山に登るのはわたしには無理ってこと？」

ボナ先生「いつかはできる日がくるかもしれない。可能性は誰にも否定できない。やりたい気持ちも分からなくはない」

ララ「わたしのこと叱らないの？」

ボナ先生「また同じことをするのかい？」

首を横に振るララ。

ララ「山は一人で入るものじゃないってスズさんにも言われたし、今のわたしには無理だって分かったから」

ボナ先生「そう。今のララには向かないことだ。もしかしたらずっと向かないかもしれない。それを受け入れるためには、向いたことを見つけたらいいと思うんだ。なぜだか分かるかね？」

ララ「どうして？」

ボナ先生「向いたことを一生懸命していたら、向かないことができなくても気にならないからだよ。できないから、しないにかわる」

ララ「でも広い世界を見てみたい。ずっと家なんていやだ」

ボナ先生「無理のない範囲ですればいいさ。でも、本を読むことも知らない世界を広げてくれると思わないか？」

ララ「勉強を頑張るの？」

ボナ先生「それも大切だ。しかし、わたしがすすめたいことは他にある。ララはタロットに興味はないだろうか？」

ララ「ボナ先生が持っていたカード？」

ボナ先生「トートカードとは絵が違うが、子ども向けのタロットカードがここにある。一枚ずつ見てごらん」

22枚のタロットカードをララに渡すボナ先生。

一枚ずつ絵を見ていくララ。

ララ「ステキ」

ララに本を渡すボナ先生。

ボナ先生「この本に意味が書いてある。カードも本も、昔、わたしが使っていたものだ。ララに貸してあげよう」

ララ「いいの？」

ボナ先生「このセットは大アルカナ22枚だけだが、小アルカナとあわせて、全部で78枚をフルセットという。22枚で人を占って、おこづかいを稼いだら、78枚を買うといい。その時カードと本を返してもらおう。そして、今度は78枚用の本を貸してあげよう。つまりタロット占い師を目指してはどうだろうか？」

ララ「わたしが人を占うの？」

ボナ先生「タロットは一つの大きな世界だ。現実の世界で思い通りに体を動かすことはできなくても、タロットを通して世界を感じれば、心の中に無限に広がる宇宙を感じられる。ララにはぴったりのアイテムだと思うんだが、ララはどう思う？」

ララ「やってみないと分からないけど、やってみたいと思う」

ボナ先生「それじゃ決まった。今日からララはわたしの弟子だ」

ララ「よろしくお願いします」

ボナ先生「冷めてしまったが、紅茶を飲んだら教室に戻って勉強しよう」

ララ「はい！」

紅茶を飲むララとボナ先生。

○ララの家・台所（夜）

机にタロットカードが広げられている。

本とカードを見比べるララ。

向かいに座りララをニコニコ見つめるソフィー。

ソフィー「タロットってそんなに面白いの？」

ララ「うん、すごく面白いよ」

ソフィー「それじゃあ、お母さんを占ってみてよ」

ララ「いいよ」

タロットを表向きに束ねて、上下が正しくなるようにそろえていく。

カードを裏返し、祈りを捧げる。

机の中央に裏返した束を置いて両手で崩し、そのまま時計回りにシャッフル。

裏返したまま束ねて右から左に帯状に広げる。

ララ「一枚選んで」

一枚を選ぶソフィー。

ララ「どっちを上にする？」

ソフィー「こっちかな」

言われた方をララから見て上にして、表に返すララ。

カードは世界の正位置。

ララ「一番強いカードだよ。いいことありそう」

ソフィー「ララはもう立派に占い師だね」

ララ「そうかな？」

ソフィー「そうだよ。これからは毎日占ってもらおうかな。お礼は村の決まりで一回30ポイントしかあげられないけど」

ララ「うん、ありがとう。いつかフルセットを買うために使うよ」

端末を出して操作するララとソフィー。

-
○保護区・全景（朝）

セミが鳴いている。

-
○センター・教室（朝）

ココアが席についている。

ララが入ってくる。

ココア「今日から3日間、親が自由区に行くから、ララの家泊まることになったんでよろしく！」

ララ「うん！」

席に着くララ。

-
○センター・前（夕方）

手をつないだらラとソフィー。

その横を歩くココア。

ララ「センターの大きなお風呂初めて」

ソフィー「家のお風呂は3人じゃ狭いから使っていいって言ってくれたのよ」

ココア「別に一人で入れたのに」

センターに入っていくララとソフィーとココア。

-
○センター・大浴場（夕方）

ソフィーに髪を洗ってもらうララ。

ココア「なんで自分で洗わないの？」

ソフィー「これはわたしの楽しみだから」

ココア「長すぎて洗えないんじゃないの？」

ララ「洗ったことないから分からない」

ココア「7歳を過ぎたら自分で洗うべきよ。お母さんがそう言っていたもん！」

ソフィー「疲れることはさせたくないし、離れていくララの髪を洗うのがわたしの楽しみなのよ。ララは悪くない。わたしのため」

ココア「バカみたい！ わたし家に帰る！」

ララ「ええ、だって一人じゃ大変でしょ？」

ココア「わたしはララみたいな甘ったれじゃない！」

ザーっと頭から湯をかぶり出ていくココア。

ララの髪を洗い続けるソフィー。

ララ「追わなくていいの？」

ソフィー「ララをこのままにはできないし、あとでココアの家に行くから大丈夫」

ララ「わたし甘ったれかな？」

ソフィー「こうして手をかけられるのは12歳までなんだもん。洗わせてちょうだい」

ララ「うん」

目を閉じ髪を洗ってもらうララ。

-

○センター・全景

ララがセンターに近づいていく。

-

○センター・受付

受付の人から荷物を受け取るララ。

ヤニック（78）が入ってくる。

ヤニック「あら、お父さんから？ いいね」

ララ「うん。そうだよ」

ヤニック「そういえば、ララちゃんはお母さんのソフィーさんを毎日占っているって聞いたけど、わたしも占ってくれる？」

ララ「いいよ。ポケットにカードあるし」

ヤニック「じゃあ、わたしの家についてきて」

ララ「はい！」

荷物を受け取るヤニック。

ヤニックについていくララ。

-

○ヤニックの家・台所

帯状に並んだ22枚のカードから一枚引くヤニック。

ララがカードを受け取る。

ララ「どちらを上に乗せますか？」

ヤニック「こっちで」

指さすヤニック。

自分から見て上にして表に返すララ。

カードは死神の正位置。

ララ「終わります」

ヤニック「終わる？ 死ぬってことかい！？」

ララ「そうじゃないけど、何かが終わります」

ヤニック「わたしは引退した老いぼれなんだ。何もしてやしない。終わるものといったら、自分の命しかないだろ！」

ララ「タロットでいつ死ぬかは分かりません」

ヤニック「いいんだ。ごまかさなくていい」

ララ「ごまかしてなんてないけど・・・」

ヤニック「占ってほしいと頼んだのはわたしだからポイントは払う。でももう二度とごめんだ」
端末を操作するヤニックとララ。

-
○保護区・全景

唇をかみしめたララが歩いている。

-
○ボナ先生の家・台所

紅茶を飲むボナ先生。

チャイムが鳴る。

扉を開けるボナ先生。

ララが立っている。

ララ「あの、お父さんが紅茶とお菓子を送ってくれたから、一緒に食べようと思って」

ボナ先生「今、お茶にしていたところなんだ。まだポットにララの分もある」

ララ「でも、もらってばかり」

ボナ先生「それなら、お菓子を一つもらおう。それでわたしには十分だ」

ララ「はい。お邪魔します」

椅子に座って箱を開けるララ。

ララの前に紅茶の入ったカップと砂糖入れを置くボナ先生。

ララが開いた箱からクッキーの袋を取りだし、ボナ先生に渡す。

ボナ先生「一つもらおうよ」

袋を開けて、1つ食べて、ララに返すボナ先生。

突然、泣き出すララ。

ボナ先生「どうしたんだ。クッキーなら本当に一つで十分だよ。実は、甘いものを控えているんだ。血糖値が高くてね」

ララ「違うんです。わたし大変なことをしちゃって」

ボナ先生「落ち着いて。まずは紅茶でも飲みなさい」

砂糖を入れて、紅茶を飲むララ。

ララ「今日、初めてお母さん以外を占って」

ボナ先生「何のカードがでたんだね？」

ララ「死神の正位置です。だから終わるっていったら、死ぬと言い出して。違うって言ったんだけど、分かってもらえなくて、わたしはどうしたらよかったんだろう？」

ボナ先生「死神のカードは見ただけで怖がる人もいる。絵から死をイメージするからね」

ララ「何が終わるか分からないし、ポイントはくれたけど、二度と占ってほしくないと言われてちゃうし、だんだん悲しくなってきた」

ボナ先生「そうだね。ララに好意的なお母さんを占うのとは違うからね」

ララ「どうしたらよかったんですか？」

ボナ先生「それはララが答えを見つけるしかない。いっぱい占うしかないんだよ」

ララ「でもわたし、もう人を占うのが怖い」

ボナ先生「心の中の一番気になっていることが強く出るから、毎回同じにはならないし、いろいろ考えて、いっぱい占って、経験を積むことでしか身につかないことなんだよ」

ララ「ボナ先生ならどうしたの？」

ボナ先生「わたしなら区切りと言ったかもしれない。しかし、それをそのまま言っても、相手がどう受け止めて、何を聞き返してくるか分からないのだから、困るだろう」

ララ「それは・・・」

ボナ先生「自分の中に伝えたい思いがなければ、どうにもならない。わたしが言ったことを暗記して解決する問題じゃない」

ララ「わたしは占いを続けていいのかな？」

ボナ先生「それはララが自分で決めることだよ。わたしが判断することじゃない」

ララ「わたしもっと上手になりたい！」

ボナ先生「よし分かった。それなら新しい本を貸してあげよう」

ララ「ありがとう」

涙をぬぐってニッコリ微笑むララ。

○ララの家・寝室（夜）

ベッドでソフィーが眠っている。

ララが目を開け、ベッドから抜け出す。

鞆から手鏡を取り出すララ。

ララ「神さま、どうか人を苦しませない占い師になれますように」

手をあわせ祈るララ。

○ララの家・台所

タロットをケルト十字に並べるララ。

本とカードを見比べていく。

※占いリスト2。

表紙に「タロットノート4」と書かれたノートを開くララ。

本を見ながら、ノートに「固執」と書き写す。

端末を操作して、辞書機能で「固執」を引く。

意味を書き写すララ。

書き写した意味の中の漢字を更に引いていくララ。

-

○ララの家・全景（夕方）

ソフィーが家に入る。

-

○ララの家・台所（夜）

ケルト十字でソフィーを占うララ。

※占いリスト3。

ソフィー「新しい占い方だね」

ララ「借りた本で覚えたの。いつもしていたのは一枚引きで、今度のはケルト十字というのよ」

ソフィー「どんどん上手になるね」

ララ「そうだといいけど」

首をかしげるララ。

-

○センター・教室（朝）

ミルクがララに頭を下げている。

隣でココアがララにそっぽを向く。

-

○ララの家・台所

ケルト十字でミルクを占うララ。

※占いリスト4。

-

○ララの家・前

遠くからバケツを持ったエメが近づく。

ココアがララの家を覗いている。

エメに気づいて逃げるココア。

家からララが出てくる。

ララにバケツのアユを見せるエメ。

喜ぶララ。

-

○保護区・河原

たき火の周りに串に刺さったアユが並んでいる。

ララとエメがアユを食べている。

ボナ先生が来る。

エメがたき火のそばのアユを渡す。

受け取り嬉しそうに食べるボナ先生。

-

○字幕「2154年」

-

○保護区・全景（朝）

桜がつぼみをつけている。

-

○センター・食堂（朝）

ララ（8）を含めた村人全員が並んでいる。礼服を着ている。

トニー（39）とミルク（13）が去っていく。

拍手で送る村人たち。

泣きそうなココア（12）。

そんなココアを心配そうに見守るララ。

-

○センター・教室

ララとエメ（9）とココアが自習している。

ボナ先生（41）が見守っている。

ピピピッと鳴る。

エメとボナ先生が出ていく。

ララが帰ろうとすると、ココアに腕をつかまれる。

横を向いたまま話しかけるココア。

ココア「ララの占いを信じているわけじゃないけど、ミルクがわたしをどう思っているか知りたい。わたしのこと忘れない？」

ララ「一緒に帰りましょう」

歩き出すララ。

後に続くココア。

-

○ララの家・台所

ケルト十字を切るララ。

※占いリスト5。

心配そうに見守るココア。

周囲の位置に出たのは、節制の正位置。

カードを持ち上げココアに見せるララ。

ララ「このカードは、水をカメからカメにうつして、よく混ぜ、より細かくしているの。行き来させるからコミュニケーションという意味がある。だからミルクはココアと話したいと思っています」

ココア「1年待てばまた会えると思っても、どうしても不安だったけど、ちょっと安心した。ラ

ラはソフィーやボナ先生やスズさんに甘えているだけじゃないのね」

ララ「昔は無理して迷惑ばかりかけたけど、今は好きなことがみつかったからね」

ココア「好きなことか。わたしにはまだないな。それを探しに自由区に行くんだ」

ララ「わたしも自由区に行きたいけど、それは無理だと思う。体が弱いから」

ココア「ララはこの村に戻ってボナ先生の跡を継ぐんでしょう？」

ララ「できるかどうか不安だけど、体を動かす仕事はできないからやるしかない」
カードを集めるララ。

-
○センター・事務室（夕方）

ボナ先生がノートパソコンの前にいる。

隣で立って見ているララ。

ボナ先生「分かったね。では座ってごらん」

ララ「はい」

ボナ先生が立ち、ララが座る。

ボナ先生「たぶんララは、ラインを免除されてデータ入力の仕事に就くだろう。そうになると事務限定の卒寮資格しかもらえないから、この村に戻ったら区長補佐になるだろう。だから今からパソコンに慣れた方がいい。忙しくなるが大丈夫かい？」

ララ「はい、大丈夫です」

そっとキーボードを押してみるララ。

-
○保護区・全景（夕方）

桜が満開で散っている。

-
○センター・食堂（夕方）

レミー（35）とボンボン（7）が入ってくる。

拍手で迎え入れる村人たち。

ララと目が合いニッコリするボンボン。

-
○センター・教室（朝）

ボンボンとララが並んで座っている。

後ろにエメとココアが座っている。

ボナ先生がボンボンにタブレットの使い方を教える。

-
○保護区・全景

風に落ち葉が舞っている。

-
○センター・受付

ララが小さな小包を受け取る。

-
○ボナ先生の家・台所

小包を開いてライダー版のタロットカードを取り出すララ。

ボナ先生「ライダー版78枚を手に入れるためによく頑張ったね」

ララ「はい！」

カードに頼ずりするララ。

ボナ先生「そろそろ中級の本を読むころだ」

分厚い本をララに渡すボナ先生。

ララ「ありがとうございます」

本を受け取り、家から飛び出すララ。

-
○ララの家・台所

本を読んでいるララ。

チャイムが鳴る。

ドアを開けるとスズが立っている。

スズ「悩みはないけど、面白そうだから来た」

ララ「それならホロスコープ法で一年を見るから、座って」

部屋に入るスズ。

スズを78枚ライダー版のホロスコープ法で占うララ。

※占いリスト6。

-

○字幕「2158年」

-

○センター・食堂（朝）

エメ（13）と中年の女性が扉に向かって歩き出す。

見送る村人たち。

振り向くエメ。

手を振るララ（12）

うなずき、歩き出すエメ。

-

○センター・客室

椅子にララが座っている。

美容師がララの後ろに立つ。

ソフィー（38）が入ってくる。

ソフィー「まだ一年あるし早くない？」

ララ「自分で洗ってみて、どこまで耐えられるか知りたいから、肩まで切ってください」

肩でバツサリ切られるララの髪。

-

○ララの家・風呂場（夜）

髪の泡をお湯で洗い流し、息を切らすララ。

-

○ララの家・台所（夜）

ソフィーがお茶を飲んでいる。

バスタオルを巻きつけた裸のララが風呂場から出てきて座り込む。

駆け寄るソフィー。

ソフィー「大丈夫？」

ララ「ちょっと胸が苦しい」

ソフィー「ベッドでしばらく休みましょう」

フラフラするララを支えながら、寝室へ連れて行くソフィー。

-

○ララの家・寝室（夜）

布団をかぶって目を閉じているララ。

ソフィーが入ってくる。

ソフィー「どう？ 服着られる？」

ララ「だいぶ落ち着いた。でも連続して洗うとこの長さじゃ無理みたい。来月、美容師さんがきたら切ってもらおう」

ソフィー「そう、それまで明日からわたしが洗うから、無理しないで」

ララ「うん」

ベッドに横たわるララの隣に服を置くソフィー。

-

○センター・教室（朝）

ベリーショートになったララが入ってきて、後ろの席に着く。

ボンボン（11）が入ってくる。

ララの髪をなでるボンボン。

ボンボン「気持ちいい！」

顔を見合わせ笑うララとボンボン。

-

○字幕「2159年」

-

○センター・食堂（朝）

村人に見送られて旅立つララ（13）。

ボンボン（12）とソフィー（39）がいつまでも手を振っている。

-

○寮・全景（夜）

大きな建物が建っている。

大型バスが到着する。

子どもたちが降りてくる。

ララも降りてくる。

-

○工場・全景

車が入り出している大きな建物。

-

○工場・ライン

子どもたちがベルトコンベアの脇に立って石鹼を詰める作業をしている。

-

○工場・事務室

ララがノートパソコンのキーボードを打っている。

-

○寮・全景（夕方）

バスから降りる子どもたち。

ララも降りてくる。

-

○寮・食堂（夕方）

子どもたちが食事している。

トレイを持ったララが席に着く。

アゲハ（13）がララの隣に立つ。

アゲハ「どうしてあなただけラインにつかないの？」

ララ「それは体が弱いから」

アゲハ「寮のトイレ掃除だってしないし、本当はできるのにやらないんじゃないの？」

ララ「この髪見て」

アゲハ「髪の話なんて今はしてないでしょ！」

ララ「わたしはこの長さじゃないと疲れてしまって洗えないの」

アゲハ「そんなこと・・・たいしたことない」

立ち去るアゲハ。

エメ（14）が近づく。

エメ「どうかしたのか？」

ララ「いいえ、話しかけられただけよ」

エメ「意地悪されたなら俺に言えよ。やり返してやる」

ララ「なんでもないったら。それより食べましょう。お腹すいた」

並んで食べ始めるララとエメ。

○寮・ララの部屋

ベッドと小さな机とロッカーがある。

机の上でタロットカードの上下を揃えるララ。

アゲハが入ってくる。

アゲハ「それはなに？」

ララ「タロットカードよ。占いの道具」

アゲハ「あなた占いなんてやるの？」

ララ「ええ、それより何か用？」

アゲハ「エメって上級生が来て、あなたに手を出したら許さないって言ってきたんだけど、上級生に言いつけるなんて最低ね」

ララ「それは悪いことをしたわ。大丈夫だって言ったんだけど、エメはわたしを妹みたいに思っているから、体が弱いし、心配でしょうがないのよ。ごめんなさいね」

アゲハ「どうだかわかりゃしないわ。でもいいわ。占ってくれたら許してあげてもいい」

ララ「タロットは最長でも1年、普通は3ヶ月くらい先の展開までを読むもので、具体的にイエス・ノーが言えることに向いているの。特に悩みがないなら、今年や今週の運勢を占うこともできるけど、何か悩みがあるの？」

アゲハ「それは言えないわ。占いであててみてよ。できるでしょ？」

ララ「やれないことはないけど、漠然とした結果しかでないし、話せない悩みなら占わない方がいいと思う。秘密がさらされたら困るでしょう」

アゲハ「本当はできないんでしょ！ できるならやってみて！」

ララ「いいわ」

78枚でケルト十字で占うララ。

※占いリスト7。

4根拠にソードの3の正位置。

ララ「いやされない悲しみを抱えていることが、悩みの原因になっているようね。辛くて、苦しくて、誰かに分かってほしいけど、分かってもらえないから、小さな子どもみたいに叫びだしたいけど、それを許すことができない。そんな印象を受けました」

アゲハ「小さな子どもですって、わたしがそんな弱々しい人間に見えるの！」

ララ「本当に強い人は、自分より弱い人が加護を受けてもずるいと思わない。なぜなら、自分は支える側で、支えられる側ではないと思っているから。支えられたいのに支えられない人が自分には与えられない加護をうらやむのよ。不当な特別扱いを望む」

アゲハ「違う！ わたしはみんなのために言っているのよ。わたしのためじゃない。だってそうでしょう。あなたがしない分、誰かがやっているのよ！」

ララ「免除されたわたしは、事務限定でしか卒寮できない。当然、自由区での就職は難しい。でもあなたは違うでしょう。やっただけの結果は手に入る。差はつく。それではだめなの？」

アゲハ「保護区に戻れば関係ない。そして今度は堂々とさぼるに決まっている」

ララ「体力を回復できなければ下痢になる。ただ便がゆるいだけじゃない。勝手に出てきてしまう。そうならないように体を動かすことを免除してもらっている。あなたはわたしが大便をもらして服を汚さないかと納得しないの？」

アゲハ「それは・・・」

ララ「いくらわたしを責めても、あなたの心は晴れない。あなたはあなたの心の問題を見たくないのよ。だから、質問を語ることさえできない。占いというのは、質問を言葉にした段階で70%は答えが出ている。でも、その答えは、一つの価値観に固執した偏ったものだから、違う方向から光を当てる必要がある。だから、相手がいる。わたしは占い師として、いつでもあなたの話を聞くから、質問が言えるようになってからまた来るといい。今日はもう帰って。とても疲れた」

タロットを片付け始めるララ。

言いかけて、立ち去るアゲハ。

○寮・食堂（朝）

ララとエメが並んで食べている。

アゲハがララの隣に座る。

エメ「なにしにきた！」

ララ「いいのよ。わたしはララよ」

アゲハ「わたしはアゲハ」

ララ「今夜なら空いているわ」

アゲハ「そう」

ララとアゲハが食べ始める。

アゲハをにらみながら食べるエメ。

○寮・ララの部屋（夜）

ベッドに座るアゲハ。

机の上には展開されたケルト十字。

※占いリスト8。

椅子に座るララがアゲハを振り向く。

ララ「みんなに嫌われているかどうか占ってみたけど、1番の現在の位置に月の正位置が出たから、その悩みはあなたの心の中の出来事で、現実ではない、と読めます。考えすぎと言ったらいいかしら」

アゲハ「ララは同郷のエメと仲良くしているのに、わたしは無視されている。同級生も誰も話しかけてこない」

ララ「自分から話しかけてみたの？」

アゲハ「無理よ。そんなことして、無視されたら辛いもん」

ララ「エメは昔から強引だから、友だちと離れてでもわたしと一緒に行動しようとしたけど、多くの方は新しい友だちができたから、それをさしおいてまで昔の知り合いのところへは行かないと思う」

アゲハ「じゃあ、同級生は？」

ララ「たぶん、新しい生活になれなくて、自分のことで精一杯なんだと思う。3ヶ月後には進路も決めないといけないし、慣れない洗濯や掃除もあるし、頼る相手はもういないから」

アゲハ「ララは不安じゃないの？」

ララ「小さいころのわたしは、体が弱い自分を認められなくて、無理ばかりしていた。でもボナ先生が、したいことができれば、できないからしないに変わるからとタロットを教えてくれて、みんなと同じに行動できないことが辛くなくなったのよ。わたしはわたしだって思えるようになった」

アゲハ「自分の世界があるララがうらやましい。わたしには何もないもの」

ララ「選択すれば、その分、世界は狭まる。無限の可能性を捨てることになる。いつでも、どこでも、誰にでも通用することだけしていれば、可能性は失わないけど、形をなせない。だから、どこかで決めなくてはならない。わたしは体が弱かったから、幼いうちから占いや事務を選ぶしかなかった。でもアゲハは違う。夢見ることができる。これから決めるんでしょう。広い世界から選べて、ちょっとうらやましい」

アゲハ「そうだね。そうかもしれない」

立ち上がるアゲハ。

アゲハ「また来てもいい？」

ララ「いいけど、一回30ポイントよ」

アゲハ「ケチね」

ララ「お金と時間を決めないとお互いに真剣になれないものなのよ。まだ格安なんだからいいじゃない！」

吹き出すアゲハ。

端末を取り出して、ララに払う。

○字幕「2162年」

-

○寮・ララの部屋（夜）

ララ（16）がベッドに寝転んで端末で話している。

ララ「お母さん、自由区に出て、占い師なるのはどうしてもダメ？」

ソフィーの声「占い師としての腕は疑っていないけど、都会で一人暮らしさせるのは心配なのよ。占いなら村でだってできるのだから、わたしのために帰ってきて」

ララ「わかった。区長補佐で希望を出すよ」

ソフィーの声「ありがとう。おやすみ」

電話を切って、右手で目を隠すララ。

頬を涙が一筋流れ落ちる。

アゲハの声「ララ、入るわよ」

ララ「どうぞ」

涙をぬぐって起き上がるララ。

アゲハ（16）が入ってくる。

アゲハ「どうかしたの？」

ララ「なんでもない。それより、自由区での就職先が決まったんだってね。おめでとう」

アゲハ「ララの占いを信じて、思い切って挑戦してみてよかった。ありがとう」

ララ「そうしてもらえるとわたしも嬉しい」

アゲハ「離ればなれになるけど、これからも占ってね」

ララ「保護区に入ったらポイントではもらえないから、美味しいもの送ってね」

アゲハ「そういうと思ったわ」

爆笑するアゲハ。

少し寂しげな微笑みをたたえるララ。

-

○寮・講堂

子どもたちが背の順に立っている。

一番前に立つララ。

司会の生徒「これより卒寮式を開催します」

次々壇上に立ち、来賓たちが挨拶する。

司会の生徒「最後に、自由区代表ロロさんが歌をお届けします」

ロロ（23）が壇上に上がる。

ロロに心奪われるララ。

歌い始めるロロ。

じーっとロロを見つめ、聞き入るララ。

ロロが歌い終わる。

ロロ「では自由区で待っています」

うつむくララ。

司会の生徒「続いて生徒による行き先宣言にうつります」

生徒が一人ずつ手を上げ、自由区に行くのか、保護区に行くのか、宣言する。

ララの番が回ってくる。

ララ「わたしは・・・」

ロロを探すララ。

貴賓席でララを見つめるロロと目が合う。

ララ「自由区に行きます！」

先生たちがざわつき始める。

先生が、司会の生徒からマイクを受け取る。

先生「自由区で間違いはないのですか？」

ララ「間違いありません。自由区に出ます」

立ち上がり、拍手するロロ。

頭を下げて、席に戻るララ。

○喫茶憩い・店内

保護区の制服を着たソフィー（４２）とボナ先生（４９）が座っている。

二人の前にララが座っている。

カウンターにはサク（４３）がいる。

ソフィー「ララ、あなた突然自由区行きを宣言するなんて、みんなにどれだけ迷惑をかけたか分かっているの？」

ララ「もうしわけないと思っている。でもどうしてもロロさんのいる自由区に行きたかった」

ソフィー「会うことも叶わない相手を思ってどうなるというの？ そんなことでわたしたちを裏切るなんて信じられない！」

ララ「確かにわたしがしたことは悪いことだと思う。愚かだと言われても仕方がない。でも、こんなに体が弱くて、いつ死ぬか分からないのに、先の先の未来を考えて生きるなんて意味がない！ 今、したいことがしたい。わたしは、ロロさんの歌を聞きたい」

ソフィー「ララがそんな風に思っているなんてちっとも知らなかった。死の不安を抱えていたなんて。でも死ななかつたらどうするつもりなの？ いいえ、ララは死んだりしない。きちんと休養をとれば生きられる。だから考え直して。まだ間に合う。戻ってきて」

ララ「それはできない」

ソフィー「ララ！」

ボナ先生「ソフィーさん、落ち着いて」

ソフィー「でもボナ先生だってララのためにいろいろ準備してくださったのに」

ボナ先生「わたしは全然気にしてない。むしろ、これでよかったと思っている」

ララ「わたしのこと、叱らないんですか？」

ボナ先生「ララはもう大人だ。わたしがどうしろと口出しすることではない。だが、あえて言わせてもらえば、区長補佐だけなら何も知らないまま村に戻ってもなれるだろうが、わたしの後を継いで村の相談役になるのなら、自由区で見聞を広めた方がよいと思う。その上で、40歳までに決めればよいのだから、今は自由にさせてあげてはどうだろうか」

ソフィー「自由区は競争社会。無理をしなければ生きられない。休みが必要なララには無理よ。それこそ本当に死んでしまう」

ボナ先生「心配なのは分かるが、仮に死んだとしても、好きに生きた結果なら、それは不幸なことだろうか？」

ソフィー「好きに生きてララは幸せかもしれないけど、残された家族はどうなるの？」

ララ「お母さん、お願い。死なないように努力するから自由にさせて」

ソフィー「これ以上、何を言っても気持ちは変わらないの？」

ララ「どうしても口口さんのいる広い世界を見たい」

ソフィー「分かった。ただし、お父さんと暮らしてちょうだい。それだけはわたしも譲れない。いいでしょお父さん？」

コーヒーを入れる道具の手入れをしながら聞いていたサクが手を止める。

サク「俺は、ララには二度と会えないと思っていたから嬉しいよ」

ララたちに近づいてくるサク。

ソフィー「料理はお父さんの得意分野だから作ってあげて欲しい。自分の部屋くらいは掃除できるかもしれないけど、毎日は難しいと思う。占いの仕事もあまり多ければ負担になるだろうから、この店で依頼を受けて、様子を見ていてあげてほしい」

サク「ああ、任せておけ」

ララ「わがママを許してくれてありがとう」

立ち上がって頭を下げるララ。

ソフィー「休みがとれたら会いにくるから、元気であるのよ」

ララ「はい！」

ニッコリ微笑むララ。

○歓楽街・全景（夕方）

暮れかかった街をララが歩いてくる。

飲食店が立ち並ぶ中に劇場がある。

劇場の前で立ち止まるララ。

宣伝モニターに口口の姿が映る。

劇場に入っていくララ。

○劇場・客席（夕方）

三階まで満席の客の前で口口が歌う。

一階の後ろの方で見守るララ。

○死の街・全景（夜）

興奮して夢見心地に歩いているララ。

ふと立ち止まり、あたりを見回す。

遠くに歓楽街の明かりが見えるが、ララがいるあたりは壁に囲まれ真っ暗。

不思議そうに壁沿いに歩くララ。

扉を見つける。

保護区の制服を着た中年男性が出てくる。

男性「ここは死の街だ。空き部屋ならあるが、入るつもりか？」

ララ「死の街？」

男性「なんだ迷子か。死ぬ気がないなら早く帰りなさい」

扉に入ろうとする男性。

ララ「待って。話を聞かせて。死の街って何をするとところなの？」

男性「死ぬ覚悟を決めた人間に薬と個室を与えて、安らかに逝かせてやるところだ」

ララ「死んだらどうなるの？」

男性「朝になったら死体を回収して、焼却炉で骨も残さず灰にするのさ。そして、土にかえす」

ララ「死にきれなかったらどうなるの？」

男性「三日待つ。それで死ねないなら、薬を取り上げて、死の街から追い出す」

ララ「あなたはここで何をしているの？」

男性「食事はでないが、水は飲める。必然的にトイレも必要だ。部屋の掃除も、死体の運搬もいる。つまり、雑用を引き受けているわけだ」

ララ「どうして保護区の制服を着ているの？」

男性「死の街は自由区にあるが、保護区が管理している。志願者が選ばれて就くのさ」

ララ「どうして志願したの？ 怖くないの？」

男性「質問の多い子だ。そんなに死の街に興味があるのか？」

ララ「ええ、もしかしたら、将来わたしが来るかもしれないから場所だから」

男性「それは生き抜いてから言う言葉だ。やる前から失敗を考えるのは愚か者だ。まずは成功を信じなさい」

ララ「体が弱くても成功を信じていいのかしら？」

男性「なにをもって成功というかは、人それぞれだが、やりたいことができれば、できないことがあっても問題ないとわたしは思うがね」

ララ「やりたいことができる間は幸せで死にたいなんて思わないけど、だるくてじっと寝ていると、このまま動けなくなってしまうのではないかと、どうしようもなく不安になる。そんな時は死の街を懐かしく感じて、こここそわたしが帰る場所に思える」

男性「誰も死からは逃れられない。楽しい人も、悲しい人も、いつか必ず死ぬ。そういう意味ではここは帰る場所だ。だが、今の君にはまだ早い。さあ、君の場所に帰りなさい」

ララ「そうね。話を聞いてくれてありがとう。あなたは優しい人ね」

男性「おやすみ、よい夢を」

男性が扉の中に消える。

ララが歓楽街に向かって歩き出す。

-

○喫茶憩い・店内

ミサ（60）をライダー版78枚ホロスコープ法で占うララ。

※占いリスト9。

ララ「そんな一年になりそう」

ミサ「不倫に浮気ねえ。意外な結果だったけど、ララが言うなら気をつけてみる。ありがとう。

それにしても、あの小さかったララちゃんが、こんなに大きくなって戻ってくるなんてびっくり

りよ。しかもタロット占い師だなんて意外な才能を身につけたものね」

ララ「でも食べていけるほどお金にならなくて、父の世話になっているから申し訳なくて」

ミサ「この店だけじゃお客さんが限られているから難しいかもね。技術を売り買いするサイトに

登録して、ネット占いもしてみたら？」

ララ「やっているけど、登録者が多くて、なかなか選んでもらえなくて」

ミサ「ただでもいいから、まずは数をこなして信頼を得ることよ」

ララ「休む時間が必要だから、なかなか思い通りに進まないけど、やってみます」

微笑むララ。

-

○喫茶憩い・ララの部屋（夜）

端末を操作するララ。

机の上にはライダー版78枚がケルト十字に並んでいる。

※占いリスト10。

端末に「ご依頼ありがとうございます。ララと申します」の文字を打ち込むララ。

-

○横浜・全景

高層ビルが立ち並ぶ一角を車が走る。

-

○横浜・車中

運転席に座るエメ（17）。

助手席に座るララ。

車は自動走行中。

エメ「自由区にいるならいるって言えばいいのに、どうして黙っていた？」

ララ「隠していたわけじゃないけど」

エメ「まあいいさ。会えて嬉しいよ」

ララ「それを言うために呼び出したの？」

エメ「いや、実は頼みたいことがあって連れ出したんだ。さあ、着いた。降りて」
高級そうなタワーマンションの前で止まる車。

-
○タワーマンション・エレベーター

エレベーターに乗り込むエメとララ。

60階のボタンを押すエメ。

動き出すエレベーター。

ララ「最上階？」

エメ「そうだ」

ララ「お金持ちなのね」

エメ「俺の父の一番の支援者だ」

ララ「エメのお父さんって自分で資金を集めた貴族議員じゃなかった？」

エメ「保護区への寄付金は自分の収入で払っているが、収入の元となる事業の支援者はたくさんいる」

エレベーターが60階に止まり、扉が開く。降りるエメとララ。

-
○タワーマンション・60階・玄関

エメとララが中世のヨーロッパのお城のような内装の玄関を抜ける。

-
○タワーマンション・60階・応接間

応接間にはミュウ（15）が、高級な絹の黒いドレスを着て座っている。

エメとララが入ってくる。

ミュウ「エメさま！」

立ち上がり、エメに駆け寄るミュウ。

ララに気づいて立ち止まる。

ミュウ「誰？」

エメ「こいつはララ。保護区で一緒に育った妹みたいな存在だ。タロット占い師をしている。俺は占いなんて信じないが、女は好きだろうから連れてきた」

ミュウ「まあ、あなたがララさん。エメさまから聞いています。わたしはミュウ。15歳です」

ララ「15歳なのにどうして自由区にいるの？」

ミュウ「家庭教師が何でも教えてくれるのに、どうして保護区に入ったり、管理区で働いたりしないといけないの？ そういうのはお金がない人がすることだってお母さまがおっしゃっていたわ」

エメ「俺は保護区にも、管理区にも入ったけどな」

ミュウ「エメさまは、将来自由区で王になる方だもの。しもじものことも知らなくてはならないのだとお父さまがおっしゃっていたわ。そしてわたしはエメさまの妻になり、女王になるの！」

エメの腕を取り、隣に並ぶミュウ。

エメ「ミュウは、このマンションの最上階で生まれて、一度も外に出たことがない」

ララ「そう、それじゃあ、死の街も知らないのね」

ミュウ「知っているわ。家庭教師から聞いたもの。でもわたしには関係ない。負けた人がいく場所なんだもの」

ララ「そうかもしれない。幼稚園のころタワーから見た時、先生がそう言っていたもの。でも実際に近くまで行ったら、思っていたのと全然違っていて、懐かしくすらあったわ」

ミュウ「あなた、あんな場所の近くまでいったの？」

ララ「ええ、好きな歌手のコンサートに興奮して、ぼんやり歩いていたら、歓楽街から離れて、死の街まで来てしまったの。そこで保護区から志願して来て、死の街の世話をしている人と話したのよ。とても優しい男の人だった」

ミュウ「一人で行ったの？」

ララ「ええ、もちろん、一人よ」

ミュウ「怖くないの？」

ララ「知らない場所に行くのだから、もちろん緊張はするけど、楽しいものよ」

ミュウ「歌手って誰？」

ララ「ロロさんという人で、卒寮式に来た人よ。その人の歌が聞きたくて、保護区行きをくつがえして、自由区を選んだの」

エメ「ララは弱いくせに無茶ばかりして、昔からよく叱られていたっけ」

ミュウ「ララ、あなたのこと気に入ったわ。報酬は払うから、わたしのところに話に来て。外の話聞かせてちょうだい」

ララ「外に興味があるなら、一緒に出掛けましょう」

ミュウ「そんなことお母さまが許さない」

ララ「でも知りたいんでしょ？」

ミュウ「実際に行かなくても理解することが必要なの。むしろ体験しないことを理解することこそ女王の資質というものなのよ。だからわたしは行かなくていいの。ララが見てきて。そして、わたしに話して」

ララ「本当にそれでいいの？」

ミュウ「もちろんよ」

ララ「それなら、元気な時に話に来るわ」

エメ「占いじゃなくて、無鉄砲さを気に入るとは思わなかったが、話し相手を探すようにミュウの両親に頼まれていたから、話がまとまってよかった」

ミュウ「そうだ。いっそララがここに住んだらいいんじゃない？」

ララ「それはできない。母との約束で父の家で暮らさないといけないから」

ミュウ「親との約束ならしょうがないわね」

ララ「話したくなったら連絡して。元気なら来るから」

ミュウ「分かったわ。待っている」

握手するララとミュウ。

-

○喫茶憩い・ララの部屋（夜）

ベッドに入り端末を操作しているララ。

端末に「30万ポイント入金」の文字。

驚くララ。

ロロのコンサート日程を端末で確認するララ。

-

○大阪駅・全景

高速鉄道が駅に入る。

リュックを背負ったララが降りる。

「大阪駅」の看板を見上げるララ。

-

○大阪・アーケード

小さなお店がびっしり並ぶ通りを歩くララ。

珍しそうに、キョロキョロする。

-

○大阪・ホテル

ベッドで体を休めるララ。

-

○大阪・劇場・入口（夕方）

公園を抜けて、劇場の入り口に入るララ。

-

○大阪・劇場・客席（夕方）

満員の会場でロロが歌う。

三階の後ろの方から見守るララ。

-

○タワーマンション・60階・応接間

ミュウに端末を見せながら話すララ。

ララ「大阪には、大きなビルももちろんあるんだけど、どんなすきまにも工夫して店を出してしまふ、すさまじい商魂があつて、ごちゃごちゃ、ゴミゴミした場所が多いの。店員さんもロボットじゃなくて、人のところが多いし、昔らしさを大切にしているのかと思ったら、真逆に全自動のセルフサービスの店もあつたりして、バラエティーに富んでいた」

ミュウ「大阪といったら食の街でしょう。何か美味しいものはたべなかったの？」

ララ「お米をたくさんたべると押し出される危険が高くなるし、油の強いものはだめだし、すごく限られてしまうけど、だし文化で、うどんがとても美味しかった。いろんな種類があるけど、まずは一番のおススメがいいだろうと、きつねうどんにしたの。昆布とカツオのきいたうすめの醤油味の汁に、甘目に煮つけられたあげがのっていて、それはそれは美味しかったわ」

ミュウ「横浜とどっちが好き？」

ララ「横浜はうどんよりラーメンおしだし、わたしはどちらかというとうどんは関東より関西の方が美味しいと思う」

ミュウ「へえ～、ほかには？」

ララ「いか焼きといって、イカと卵を平たく焼いたものにソースをぬった食べ物があるんだけど、わたしはたこ焼きより好きだった」

ミュウ「お土産にお好み焼きせんべいをくれたけど、お好み焼きは食べなかったの？」

ララ「それは次の機会にとっておこうとおもって今回は食べなかったの」

ミュウ「そうね、一度に全部味わうのは無理なもの。次があるわね」

ララ「高級なお菓子はいつも食べているだろうから、つまらないと思って、フリーズドライで本物を使っているというお好み焼きせんべいに見たんだけど、どっちがよかったかしら？」

ミュウ「庶民の味も悪くないわ」

ララ「それはよかった！」

笑いあうララとミュウ。

-

○沖縄・空港

飛行機が降りたつ。

ララが出てくる。

「沖縄へようこそ」の看板。

-

○沖縄・ホテル

ベッドで休むララ。

-

○沖縄・歓楽街・ライブハウス（夜）

ライブハウスで歌うロロ。

前から5番目の中央からロロを見つめるララ。

-

○沖縄・海中

透き通る青い海に潜るララ。

-

○喫茶憩い・ララの部屋

ベッドに横たわり、苦しそうに肩で息をするララ。

-

○タワーマンション・60階・応接間

エリック（40）が座っている。

ダークグレーの高級なスーツ姿。

ララが入ってくる。

エリックを見て、驚くララ。

ララ「初めまして。ララと申します。ミュウさんに呼ばれてきたのですが、いらっしゃいませんか？」

エリック「わたしはエリック。ミュウの父だ。わたしがミュウの名前で秘書に君を呼ばせた。座りたまえ」

エリックの正面に座るララ。

エリック「君はミュウからもらったお金で、好きな歌手を追いかけて、旅をして、その話をミュウにしていると聞くが違くないか？」

ララ「その通りです」

エリック「行動力には感心するが、結局は、システムに寄生しているだけの無益な存在。ミュウには不要な情報だ」

ララ「遊んでいるだけだとおっしゃりたいなら、その通りだと思います。体が動く間に、やってみたいことをしているだけですから」

エリック「保護区の人たちは働くことで貢献している。自由区で儲けたものは、保護区を維持するために必要なお金を払うことで貢献している。つまり、保護区が政治的な安定を作り、自由区が経済的な自立を果たし、国を回しているわけだ。そこにただ乗りしているのが、君たち庶民というわけだ。恥ずかしくはないのか？」

ララ「考えたことはありません」

エリック「では考えたまえ。わたしの娘ミュウは、システムを考えるための体験を求めているのであって、遊び暮らす体験を理解する必要などないのだから」

ララ「理解することが必要なら、どうしてミュウさんを外に出してあげないのですか？」

エリック「命を狙われる危険があるからだ。誘拐される可能性が高い」

ララ「ここは安全で何でもあるかもしれないけど、あなたはシステムにすごく貢献しているかもしれないけど、ミュウさんにはなんの自由もない」

エリック「いや、世界を背負っている。それ以上に意義のあることなどない」

ミュウが入ってくる。

ミュウ「あらララ、来ていたの。沖縄はどうだった？ なかなか来てくれないから心配したわ」

ララ「とても素敵だったわ。でも動き過ぎて、戻ってから寝込んでしまったの」

ミュウ「話を聞かせてちょうだい」

ララの隣に座るミュウ。

エリックが立ち上がる。

エリック「楽しいことで一生を埋めるには人生は長すぎる。いずれ飽きたときがくるだろう。その時、わたしの言葉の意味を知るだろう。覚えておきなさい」

ララ「はい、忘れません」

立ち去るエリック。

ミュウ「お父さまにはっきり答えられるなんてララはすごいね。わたしはいつももじもじしてしまうわ」

ララ「親子なのに他人みたいね」

ミュウ「よその家のことは分からないけど、ここではお父さまが絶対、次にお母さま。わたしは言われるままよ」

ララ「ふーん、うちはお母さんが一番強いけど、いざとなったときのわたしの頑固さには誰もかなわないって笑って言われたわ」

ミュウ「そうよ。体が弱いのに、よく沖縄まで行けたわね！」

ララ「だって一生のうちの一週間寝込むだけなら、いかにくちや損でしょう？」

ミュウ「でも動きすぎたらアレなんでしょう？」

ララ「そこはわたしも悩んだところよ。でも気づいたの。食べなければお腹は空だから出ないはずなのよ！」

ミュウ「え？」

ララ「もちろん、全然食べないというわけにはいかないけど、極力食べない。ゆし豆腐とか軽めのものにしたの」

ミュウ「ゆし豆腐？」

ララ「沖縄の伝統料理で、ドーンとどんぶりに豆腐が入って出てくるの。だしで煮て軽く塩味をつけた感じで、小皿にうつして、島唐辛子の調味料コーレーグースをかけたり、味を変えて楽しむの」

ミュウ「ちょっと想像できないなあ」

ララ「そうね。とっても独特だから言葉で説明するのは難しいと思って、コーレーグースはお土産に買ってきたわ」

ミュウ「まあ、嬉しい！」

ララ「ミュウのうちではでないかもしれないけど、父にもお土産で買って、うちではシンプルに冷奴にかけたらおいしかった。うどんにいれてもおいしいし、万能調味料なのよ」

ミュウ「わたしも料理人に作ってもらっていろいろ試してみるわ」

ララ「そんな風に、食べ物に気をつけて、ライブとスキューバーダイビングを乗り切ったの」

ミュウ「海はどうだった？」

ララ「本当は青の洞窟に行く予定だったんだけど、風が強くて、島影の波が少ない場所に変更になったの」

ミュウ「それは残念ね。でもキレイだったんでしょう？」

ララ「ええ、とっても。水族館のガラスの中に入り込んでしまったと思えるくらい、透き通っていてはっきり見えた。魚もカラフルでキレイだったけど、こっちはぶつからないように遠慮しているのに、向うはわりと容赦なく近寄ってきて、人になれているみたいだった」

ミュウ「サンゴとかもあったの？」

ララ「ぽん、ぽん、とまとまってある感じで、砂地のところも広がっていたわよ」

ミュウ「魚以外には何がいたの？」

ララ「黒いナマコ！ なんとも言えない感触でもものすごく気持ち悪いよ」

ミュウ「触ったの！？」

ララ「だって二度とない機会かもしれないのだから」

ミュウ「もぐるだけでも十分大変じゃない？」

ララ「機材の準備はお店の人が全部してくれるけど、島に着くまで40分くらい船に揺られて、酔いそうになったわ。ウェットスーツは行く前に着ていくからいいんだけど、水中メガネはくもらないように、唾液を内側にぬるのだけど、あまりに緊張していて、口の中がカラカラで、全然唾液がでなくて困ったわ。お店の人には、きたくないからつばをはきかけて、って言われたんだけど、どうしても出てこなくて、時間がかかってしまったわ」

ミュウ「けっこう原始的なやりかたなのね」

ララ「そうね。でもそれが一番いいんですって。やっと水中メガネをつけて、ボンベの重さにフラフラしながら水中に入ったら、10mくらい先の海底まで360度バーンと見渡せて、感激しちゃった！」

ミュウ「息は苦しくないの？」

ララ「ゆっくり吐き続けて、吐き切ったら、勝手に酸素が流れ込んでくる感じ。鼻で息をしたら駄目だから、ともかく口から吐くことだけ考えていたの。そしたら、初めてにしては酸素の減りが少なく、上手だってほめられたわ」

ミュウ「へえ～、意外な才能ね」

ララ「そうなのよ。一人で潜れる免許を取りたくなって、いろいろ調べたんだけど、水中でマスクを外さないといけないと分かってあきらめたわ。それは怖くてできない」

ミュウ「そうね。失敗したら死んじゃうものね」

ララ「免許がないと、インストラクターと手をつないで泳ぐ決まりなんだけど、好きな方に泳がせてくれたから、とても楽しかった」

ミュウ「いいなあ」

ララ「行く前に一ヶ月くらい安静にして、食べるものに気をつけたけど、それでも帰ってから一週間くらい寝込んだわ。体の向きを変えただけでもれて困ったけど、いってよかったと思う」

ミュウ「元気でなかなかやらないのに、よくやると思う」

ララ「そうかな？」

ミュウ「そうだよ」

ララ「次は空に行きたいとパラグライダーについて調べたんだけど、走れないし、天気次第だし、空は海より難しく、さすがにあきらめたわ」

ミュウ「どこまで行く気なのよ!？」

ララ「九州とかも行ってみたけど、ラーメンは食べられないのが残念」

ミュウ「それじゃあ、ロロさんが目当てなんだか、旅がしたいだけなんだか、分からないよね」

クスクス笑うミュウ。

ララ「いろんな制限も、ロロさんに会えると思うからこそ耐えられる。ロロさんあつての旅よ」

ミュウ「会いたいとか、話したいとか、思わないの？」

ララ「何を話せばいいのか分からないし、何より舞台上で歌う姿が一番好きなの。舞台をおりたロロさんも好きだけど、会場で見られるだけで、同じ空間にいただけで、わたしは満足なの。遠く

から見守っていたい」

ミュウ「ちょっと分かる。わたしもエメさまのそばにいられるだけで幸せだから」

ララ「早く結婚できるといいわね」

ミュウ「今は修行の時だから会うこともなかなか叶わないけど、エメさま以外の人とは絶対に結婚はしないわ。いくら両親の言うことでもそれだけは絶対ダメ」

ララ「幸せになってね」

ミュウ「もちろんよ。あなたもね、ララ」

ララ「そうね。約束するわ」

指切りするララとミュウ。

-

○字幕「2172年」

-

○山奥・全景

激しい地震が起きる。
山が崩れ、土が溢れる。
居住区に土砂が押し寄せる。

-

○横浜・劇場・客席

ロロ（33）が舞台上で歌う。
舞台上に「震災チャリティーコンサート」の垂れ幕。
2階の2番目中央で見るララ（26）。

ロロ「先日の地震で被害に遭われた方のために集まってくれてありがとう。僕には歌うことしかできませんが、少しでも応援できたらと思っています」

考え込むララ。

-

○タワーマンション・60階・応接間

ミュウ（24）が座っている。
ララが入ってくる。
うつむいたまま立ち尽くすララ。

ミュウ「ララ、どうしたの？」

ララ「わたし、保護区に戻ろうと思うの」

ミュウ「いきなり、何を言い出すの？」

ララ「もしかしたら死んでしまうかもしれないと、好奇心を満たすために10年好きに生きてきた。とても楽しかったけど、もうやりたいことがないの」

ミュウ「世界は広いんだから、まだあるはずよ。わたしに話して聞かせてよ」

ララ「手軽に体験できることは、手伝ってもらってなんとかなる。でも、先に進もうと思ったら、自分の能力に縛られてできない。見えない壁があるの。遊ばせてもらうことはできても、自分でできるようにはならないし、まして人の役にはたてないの」

ミュウ「ララは占い師として、人の役にたっているのでしょうか？」

ララ「それは父がいたからできたこと。体力のないわたしは、毎日ごはんを作ることはできないし、掃除だってきちんとはできない。手抜きばかり。洗濯だって、干すのは父で、取り込むのも父。たたむことしかしてない。つまり、父がいないと成り立たない暮らしなのよ。このままずっと自由区にいることはできないし、長くいればいるほど父が自分の老後資金をためることができなくなる」

ミュウ「お金のことならわたしがなんとかするから」

ララ「それでは、父からミュウに寄生の相手がうつるだけで、わたし自身は何の役にも立っていない。生きている間にしていることは遊んだことだけ。だから何かがしたいのよ。それができる場所は、競争の激しい自由区ではなく、事務限定という条件付きでも受け入れてくれる保護区だと思う」

ミュウ「ララが何もしていないなら、わたしはどうなるの？ 寮だって行ってない。親に与えられるままに今日まで生きてきて、エメさまと結婚することだけが望みなのに、エメさまは忙しくて全然会いに来てくれない。その上、ララまでいなくなったら、わたしはどうしたらいいの？」

ララ「ミュウには女王になるという夢があるじゃない。わたしは、ミュウならなれると思う」

ミュウ「そんなの何も分からない子ども時代の夢でしかない。家から一步も出たことがないわたしが、なにかをするなんて無理に決まっている。誰かに頼ってしか生きられないのよ」

ララ「ミュウは家庭教師に習って、誰よりいろんなことを知っている。礼儀作法だって身につけている。どこに出ても恥ずかしくないだけの教養がある。だから、勇気を出してこの家から出たらいいと思う。そして、エメの隣に立ったらいいと思う」

ミュウ「エメさまの隣に？」

ララ「そうよ。誰だって最初は怖いものよ。でも、慣れたら楽にできるわ。最初の一步を踏み出すかどうかなのよ」

ミュウ「わたしにできるかしら？」

ララ「失敗してもいいのよ。一度で完璧にしようとおもわなくていいの。少しずつ上手になればいいの」

ミュウ「そうしたいけど、両親が許さない」

ララ「16歳を過ぎたら、もう一人前なのよ。親の言いなりにならなくたっていいのよ。たとえ誘拐される危険があったとしても、この家に一生閉じこもって過ごすより、そとに出て死んだ方がましだとわたしなら思う。実際、親の反対を押し切って自由区で暮らして来たのだから」

ミュウ「そんなこと誰にでもできることじゃない。わたしには無理よ」

ララ「ごめん、その気持ちはわたしには分からない。弱いくせいに無鉄砲だっていつも言われるけど、その通りなんだと思う」

ミュウ「第一、口口さんに会えなくなるのよ。それを分かっている保護区に戻るの？」

ララ「口口さんはチャリティーコンサートを開いて困った人を助けている。だから歌を聞きながら、わたしには何ができるだろうって考えたの。口口さんに恥ずかしくないわたしになりたいと思った。会えなくなっても、保護区でみんなのために働いてみたいと思ったのよ。自分のためだけに生きるのは十分したから、今度は村の役に立ちたい」

ミュウ「きっともう心変わりしないんでしょうね。でも、保護区に行っても、連絡を取り合うことならできるでしょう。そうしてくれるわよね？」

ララ「今までみたいに頻繁にはできないかもしれないけど、ミュウと話すの楽しいよ」

ミュウ「ララも楽しんでくれていてよかった。それにしても、自分の思いをどんどん実現しちゃおうララがうらやましい」

ララ「わがままなのよ。わたしはきっと」

握手するララとミュウ。

-

○字幕「2173年」

○喫茶憩い・ララの部屋（夜）

手鏡を取りだし祈るララ（27）。

ララ「神さま、どうか最後にもう一度だけロロさんに会わせてください。一目見るだけでいいんです」

祈り続けるララ。

○喫茶憩い・店内

カウンターに座り、紅茶を飲むララ。

サク（54）がカウンターの内側に立ち、ララを見守っている。

サク「寂しくなるな」

ララ「今までありがとう」

店の扉が開く。

ロロ（34）が入ってくる。

驚くララ。

ロロ「ここでタロット占いをしていると聞いてきたんだけど」

サク「悪いね。今はもうやってないんだ」

ララ「いいえ、やります。やらせてください」

ロロ「いいの？」

ララ「もちろんです。すぐに準備しますから、ちょっと待っていてください」

人目につかない一番奥の席にロロを案内するララ。

一人で座って待つロロ。

ララが、タロットと敷物を持って戻ってくる。

ララ「占いたいことはなんですか？」

ロロ「実は、ずっと付き合っていた恋人と別れてしまったんだ。だから、僕に運命の人なんているのかなって不安になってしまって、占って欲しいと思ったんだ」

ララ「分かりました」

ライダー版78枚を左手に持って、質問を口に出すララ。

ララ「運命の人に出会えますか？」

時計回りにシャッフルするララ。

カードを一つにまとめる。

左手で三つの山に分けて、順番をかえて一つに戻す。

ケルト十字を展開する。

※占いリスト11。

ララの手元を見つめるロロ。

一番から順番にカードが置かれていく。

1 女帝3 正、2 ソードのキング正、3 ソードのページ正、4 法王5 逆、5 カ8 逆、6 皇帝4 逆、7 ワンド8 正、8 ソードエース逆、9 ペンタクルナイト正、10 ペンタクルクイーン正、ワンポイント節制14 正。

ララ「とても難しい配置になりました」

ロロ「どういうこと？」

1 女帝3 正をさすララ。

ララ「彼女はあなたの彼女だと感じています」

6 皇帝4 逆をさすララ。

ララ「しかし、あなたは彼女の彼氏ではないと感じています。二人が一緒になることは危険が伴いそう。別々に暮らしたまま、連絡だけ取りあうような、奇妙な関係になりそう。それは突然の変化で、急に始まるようです」

ロロ「運命の人には会えるけど、その人と一緒に暮らすことはできず、離れ離れになってしまうけど、つながりはあるってこと？」

ララ「そうです。そんな感じですね」

ロロ「ふーん、一人ぼっちというわけではないんだ」

2 ソードのキング正をさすララ。

ララ「障害の位置に孤独という意味のカードが出ているのですが」

3 ソードのページ正をさすララ。

ララ「本心にはもっとみんなと話したいという気持ちがあらわれていて」

4 法王5 逆をさすララ。

ララ「しかし、なかなか縁ができないというジレンマを感じているようです」

ロロ「確かに、人に囲まれた仕事だが、見えない壁があって、見られるだけでこちらから知ることはできないんだ。その時、その場だけの関係で、幻のようにみんな消えてなくなってしまう」

ララ「そんなことはありません。見えなくなっても、ずっと思い続けています」

ロロ「どうしてそう思う？」

ララ「わたしがそうだから、そう思うのです」

ロロ「僕を知っているの？」

ララ「ええ、卒寮式で歌を聞いて、自由区行きを選びました。きっと覚えてないでしょうけれど」

ロロ「ごめん、覚えてない」

ララ「いいんです。個人的な思いを語るなんて、占い師として失格です。わたしこそごめんなさい」

ロロ「僕は占ってもらってよかったよ。いくらだっけ？」

ララ「もうすぐ保護区に入るので、お金はいりません。会えてよかったです」

ロロ「それでは僕の気持ちがすまない。何か願い事はない？」

ララ「それなら・・・今日一日、わたしとつきあってください」

ロロ「その言葉の意味を知っていて言っている？」

ララ「はい。経験はありませんが」

ロロ「いいだろう。ついてきて」

ララ「はい！」

ロロのあとをついていくララ。

-

○ビジネスホテルの一室

ベッドに横たわり、シーツにくるまるララ。

ベッド脇で、ズボンをはくロロ。上半身は裸。

ロロ「僕はもういかなくتهはいけない。きみは痛みがひくまで休んで帰るといい」

ララ「そうします。ありがとうございます。さようなら。もし・・・いえ、なんでもありません。お元気で」

上着を着て、部屋を出ていくロロ。

シーツを体に巻きつけたまま、起き上がるララ。

ララ「神さまありがとう」

両手をあわせて祈るララ。

-

○センター・駐車場

バスが着く。

ララが降りてくる。

ソフィー（53）が駆け寄る。

ソフィー「おかえり」

ララ「ただいま」

抱き合うソフィーとララ。

占いリスト 11件

質問を考えて、実際にタロットを切って、配置と解説をまとめたリスト。

※シナリオ上では、カードが並んでいるだけのシーンもある。

※わたしが感じたことを書いたもので、いろんな解釈があります。

1. ボナ先生の自分占い：トートタロット78枚：生命の樹

この村でわたしは何をしたらいいですか？

トートタロットを買ってから、実際に占ったのはこれが初めて。

生命の樹の展開も初めて。

読み方はよく分からない。

1 ケルテ：王冠：魔術師 1 正

2 コクマー：叡知：剣 6 正：科学

3 ビナー：理解：円盤 3 正：作業

4 ケセド：慈悲：剣 9 正：残酷

5 ゲブラー：力：剣 8 正：干渉

6 ティファレット：美：剣 7 逆：無益

7 ネットアク：勝利：棒の王子逆

8 ホド：壮麗：剣 5 逆：敗北

9 イェソド：基盤：棒 1 正：火の力の根源

10 マルクト：王国：塔 16 逆：戦争

いくつかから置いていいのか分からなかったなので、ホラリー法で出した9枚目から連続して10枚置いた。

人々と関わり、白黒つけて、導き、共通認識をつくるためにぶつかり合うのだろうか？

「剣＝言葉」と考えたら、話し合いをテーマにするファンレターにつながる。

2. 自分で自分を占う：藤森緑22枚：ケルト十字

占いが上手になりますか？

1 現在：吊るされた男 12 正：時間がかかりそう。

2 障害：死神 13 逆：一回やめて復活。

3 本心：恋人たち 6 逆：間違った選択をした。

4 根拠：塔 16 逆：ショックを受けた。

5 過去：法王 5 正：ボナ先生の導きがあった。

- 6 近未来：力8逆：リードできない。
- 7 行動や考え方：月18逆：不安から解放される。
- 8 周囲：審判20逆：悪いうわさがたつ？
- 9 実際の進展：星17正：希望を持ち続ける。
- 10 最終結果：世界21正：身につく
- ワンポイント：魔術師1正：四大元素を操る？

(びっくりするくらいストーリー通り)

ボナ先生のアドバイスを受けて占いを始めたけど、ヤニックさんに対して選択をあやまって失敗してしまって、怖くなってしまふ。

自信を持つことができなくなる。

周りも悪い噂を信じて、依頼してくれないかも。

しかし、希望を失わず、取り組み続けることで、技術を身につけることができそう。

考えすぎないことが大事かな。

3. ソフィーを占う：藤森緑22枚：ケルト十字

今週のソフィーはどうですか？

- 1 現在：正義11正：経済？
- 2 障害：運命の輪10正：今はその時ではない。
- 3 本心：審判20正：よい知らせを期待している。
- 4 根拠：女帝3正：母としてララともっと一緒にいたい？
- 5 過去：愚者0正：ララに振り回されていた？
- 6 近未来：力8正：リードしてあげられる。
- 7 行動や考え方：恋人たち6正
- 8 周囲：死神13正
- 9 実際の進展：戦車7逆
- 10 最終結果：塔16逆
- ワンポイント：魔術師1逆

1 回目は7枚逆だったのでやり直した。

ララのことばかりかまっていなくて、もっと村の人と交流した方がよさそう。すぐには仲良くなれないし、ケンカしてしまうかもしれないが、始めることが大事。

4. ミルクを占う：藤森緑22枚：ケルト十字

希望の仕事に就けますか？

- 1 現在：塔 1 6 正
- 2 障害：太陽 1 9 逆
- 3 本心：世界 2 1 逆
- 4 根拠：吊るされた男 1 2 正
- 5 過去：節制 1 4 逆
- 6 近未来：隠者 9 逆
- 7 行動や考え方：悪魔 1 5 正
- 8 周囲：死神 1 3 正
- 9 実際の進展：戦車 7 逆
- 10 最終結果：恋人たち 6 逆
- ワンポイント：法王 5 正

残念ながら今、心に思っている仕事に就くことは難しそう。少ない情報から選んでいることが原因のよう。

こだわるポイントは本当にそこなのか、考え直すことが求められています。

欲望や惰性に従って間違った方向に進んでいませんか？

周囲も今の希望から変えた方がいいと考えているようです。

人の話を聞くことが鍵のようです。

5. ココアを占う：藤森緑 2 2 枚：ケルト十字

ミルクはココアを忘れないですか？

8 周囲が、節制 1 4 正

- 1 現在：運命の輪 1 0 正：挑戦の時
- 2 障害：審判 2 0 正：挫折を経験するかも
- 3 本心：隠者 9 逆：先入観で本当の姿が見えてないかも
- 4 根拠：星 1 7 正：自分にあった仕事が必ず見つかる。
- 5 過去：死神 1 3 逆：一回喧嘩別れした？
- 6 近未来：魔術師 1 正：始める時
- 7 行動や考え方：愚者 0 正：流れに乗ってみるのもいいかも
- 8 周囲：吊るされた男 1 2 正→節制 1 4 正：コミュニケーションをとりたい
- 9 実際の進展：節制 1 4 逆→吊るされた男 1 2 逆：忍耐が必要
- 10 最終結果：月 1 8 正：気持ちが弱ってしまうかも
- ワンポイント：世界 2 1 逆：同じことの繰り返しがかたえる

ミルクは今、挑戦の時を迎えていて、先入観にとらわれず、本当にしたいことを見つけないといけない大切な時なの。

時間はかかるけど、きっと見つかると思う。でも、見つけたとしても、忍耐の時だから、同じことの繰り返しで、成長が感じられず、気持ちが弱ってしまうかも。

過去に喧嘩して一度離れたことがあるかしら？

ある。占いのことで喧嘩になった。

今は、とても話したがっているよう。

6. スズを占う：ライダー版78枚：ホロスコープ法

今年のわたしはどうですか？

悩みはないが、ララのすることに興味を持って占いに来た。

1 ハウス：ワンドのページ逆：はじめられないかも？

2 ハウス：ワンドクイーン正：年上の女性から支援を受けられるかも

3 ハウス：カップ2正：コミュニケーションはよさそう。

4 ハウス：ソードキング逆：家族に反対されそう。

5 ハウス：審判20逆：妊娠は期待できないかも。

6 ハウス：ペンタクルページ逆：無責任な人に振り回されそう。

7 ハウス：ワンドエース逆：結婚には至らなさそう。

8 ハウス：ソードのページ正：彼はまだ自分のことで精一杯かも。

9 ハウス：ソード10逆：辛い状況から回復しそう。

10 ハウス：ペンタクル4逆：報酬にこだわりそう。

11 ハウス：カップ7正：友だちだからと信じすぎないで。

12 ハウス：ペンタクル7正：すぐ結果を出そうとしないで、土台から見直して。

ワンポイント：ペンタクル3逆：技術不足。

新しいことをはじめるより、土台から見直した方がよさそう。

利益を追い求めないで、確かな技術と、そうすべき根拠を理解して。

結婚や子宝には今はめぐまれなさそう。

でも、コミュニケーションは活発そう。

しかし、友だちだからといって、何でも許してしまうのは考え物。

今年は、確かな技術を身につけることを優先するといいかも。

7. アゲハを占う：ライダー版78枚：ケルト十字

悩みが何かを占って。

4 根拠がソード3正。

1 現在：ソードナイト正：どんどんすすみたい。

2 障害：カップ7逆：妄想して、現実がっかり。

- 3 本心：カップクイーン逆：いじわるされている気分。
- 4 根拠：カップ2正→ソード3正：悲しみ。
- 5 過去：ワンドエース正：以前は積極的に関わられた。
- 6 近未来：ソードキング逆：ルールを厳しく感じている？
- 7 行動や考え方：塔16正：ショック
- 8 周囲：カップ3正：グループ活動。
- 9 実際の進展：ペンタクル7正：不満を感じている。
- 10 最終結果：ペンタクルペイジ逆：プライドが高い。
- ワンポイント：ソード7正：周りが信用できない。

みんなでわいわいやりたいけど、なぜかよそよそしくて、いじわるされている気分。
不満があるが、プライドが邪魔して、周りを信用できない。
とても悲しいと感じている。

- 8. アゲハを占う：ライダー版78枚：ケルト十字
わたしは嫌われているの？
1 現在が月18正。

- 1 現在：ペンタクル2逆→月18正：心の中の問題
- 2 障害：カップ10正：見せかけの幸せを求めすぎ
- 3 本心：ペンタクル3逆：子どもっぽい考え方
- 4 根拠：ワンド6逆：敗北。うまく流れに乗れてない？
- 5 過去：ソード7逆：アドバイスを受ける。
- 6 近未来：ペンタクルペイジ正：一人でやりぬく。
- 7 行動や考え方：ソードクイーン正：キャリアを築く。
- 8 周囲：悪魔15正：ダラダラしすぎ。
- 9 実際の進展：カップ7正：夢見ている。
- 10 最終結果；カップキング正：芸術方向への関心。
- ワンポイント：カップ9正：成功。

嫌われているというより、夢見すぎて、耐えなくてはいけない現実を見ていない。
今は、一人で、群れないで、頑張る時。
特に芸術的なセンスを生かすことがおススメ。
デザインとか、そういう仕事に応募してみても。
仕事に打ち込むことで、つながりをもてそう。

※ペンタクル2逆は、見せかけの楽しさという意味があったから、そのままだでもよかったかも

9. ミサを占う：ライダー版78枚：ホロスコープ法
ミサの一年はどうですか？

- 1 ハウス：悪魔15正：こだわりがよくなりそう。不倫。
- 2 ハウス：女教皇2逆：駄目だと思いつつお金をつかってしまいそう。
- 3 ハウス：塔16逆：軽い喧嘩とかありそう。
- 4 ハウス：ソード5逆：家庭が赤字になりがち。
- 5 ハウス：ペンタクル4正：自分を守って使わない。
- 6 ハウス：ソード3逆：悲しみの時期が終わりそう。
- 7 ハウス：ソード2逆：パートナーの浮気に注意。
- 8 ハウス；カップ3正：グループ交際。
- 9 ハウス：太陽19正：海外に行ってみるのもいいかも。
- 10 ハウス：カップ5正：仕事に不満を持ちそう。
- 11 ハウス：ソード10正：友だちの裏切りに注意。
- 12 ハウス：カップエース逆：偽りの愛。会えなくなる。
- ワンポイント：カップクイーン逆：浮気者。

グループ交際に縁のあるときなので、楽しいことも多いけど、トラブルにも気をつけて。
とくに不倫や浮気に注意。

浪費しやすい時。

自分の分を守って、周りを考えない態度はよくないことです。

意志を強く持つことが災いを避ける鍵になりそう。

10. ネット占い：ライダー版78枚：ケルト十字
彼はわたしをどう思っていますか？

- 1 現在：ペンタクルクイーン正：落ち着いた気持ちでいる。
- 2 障害：悪魔15正：性の扱いが問題。
- 3 本心：ワンド3逆：職場で恋のチャンス。
- 4 根拠：女教皇2逆：甘えられない。冷たい印象。
- 5 過去：ワンド8逆：嫉妬を感じていた。
- 6 近未来：正義11逆：つき合いの中で損得勘定が働く。
- 7 行動や考え方：ペンタクルエース正：電話や手紙など積極的な働きかけをするとよい。
- 8 周囲：ペンタクル6正：よく思っている。
- 9 実際の進展：ペンタクル9正：リッチになれる？

10 最終結果：ペンタクル8正：コツコツ頑張る姿勢。

ワンポイント：ペンタクルキング10：パトロン的なサポート？

お金がキーワードのよう。

ないというより、あるから期待してしまう気持ちと、そんなことで好きになったわけじゃないと否定する気持ちが交錯する感じ。

抑えている態度が、冷たい印象を与えて、好きという気持ちが伝わってないかも。

男性として魅力を感じていることを電話や手紙でアピールするとよいかも。

11. 口口を占う：ライダー版78枚：ケルト十字

運命の人に出会えますか？

※シナリオの中で詳しく解説する。

1 現在：女帝3正：近くにいるようです。

2 障害：ソードキング正：孤独が障害になっている。

3 本心：ソードページ正：もっとみんなと話したい。

4 根拠：法王5逆：しかし、なかなか縁がない感じ。

5 過去：カ8逆：ムードが冷めてしまった。

6 近未来：皇帝4逆：しかし、その人にとって、あなたは彼とはいえなさそう。

7 行動や考え方：ワンド8正：突然の変化や連絡がくるかも。

8 周囲：ソードエース逆：添い遂げることに危険が伴う。

9 実際の進展：ペンタクルナイト正：文通相手として続く可能性。

10 最終結果：ペンタクルクイーン正：自立した相手かも。

ワンポイント：節制14正：コミュニケーションが鍵。

とても難しい結果になりました。

彼女はあなたの彼女に違いないのですが、

あなたの方が自分を彼氏とは思えないようです。

一緒になることには危険を伴いそう。

別々に暮らしたまま、連絡だけを取り合うような、奇妙な関係になりそう。

それは突然の変化で、急に始まりそうです。

あとがき

読んでくれてありがとう。

シナリオ「ララ」は、2173再構築という未来世界を舞台にした120分のアニメシナリオです。

「ララ」のモチーフは、「タロット占い」です。

6歳から26歳のララを描いています。

シナリオ「ララ」の続きは、シナリオ「ファンレター」として、30分の連続アニメシナリオを想定して書く予定です。

「ファンレター」のモチーフは、「話し合い」です。

最初の「手紙形式の小説」という構想を生かして、毎回最後に口口に手紙を書く予定ですが、どうなるか分かりません。

ララの手紙を受け取るハーミットをどうするかもすごく迷っています。

2100年代だけで完結させるか、2500年代の視点を入れるか。

「よい話し合い（ララの村）」と「悪い話し合い（ハーミットの街）」という意味では、入れた方がよいのですが、連続長編は書いたことがないので戸惑っています。

シナリオ「ファンレター」では、ララは区長補佐として村の問題を解決していきます。

個人として生きるのではなく、組織の一員として生きます。

「わたし」から「わたしたち」に変わる。

作者であるわたしは、そんな生き方をしたことがないので、そこも挑戦です。

そして、シナリオ「ファンレター」のあと、話し合いを楽しむオンラインゲーム企画「民主主義」を書いて、2173再構築シリーズは終わる予定です。

資金も統率力もないから、シナリオのままアニメにはならないし、企画のままゲームにもなりません。

でも、シナリオや企画を読んでもくれる人が一人でもいれば、わたしは満足です。

想像して楽しんでもらえたらと思って書いています。

とにかく、まずは、ララの生涯を描き切ることです。

ララが最終的にどこで、何をして、どんな風に死ぬのかは、もう決まっています。

最後まで書ききれぬか分かりませんが、コツコツ続けていきたいと思います。